

# 滅びかけの世界で道中 記

湿気った銃弾

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

拝啓、お母様。

なんやかんやあつて世界が減んで……いや、滅びかけて数十年。そんな終わった世界で俺は傭兵的な事をして生きてました。

なんやかんやあつて、ふと気がついたら組織に取り込まれて1つの歯車に。

今は戦術人形達と仲良く頑張つて、毎日を楽しく必死に生きてます。

P・S 私に一人で自由な休みを下さい。

# 目次

7 頁目	6 頁目	5 頁目	4 頁目	3 頁目	2 頁目	0.5 頁目	1 頁目
112	97	79	62	31	20	15	1



## 1 頁目

ふと、脳裏へ——なぜ俺はこんな所に居なきやいけないのか、何故こんな事をせにやならなくなったのか。

唐突にそんな過去への哀愁と後悔が滲み出す。

恐らく大口徑機関砲弾によって碎けに弾け、大小穴だらけな元家の外壁へともたれて座りこむ。

ぼおー、と嫌味のように立ち上る黒煙越しに空を見上げ、鳴り止むことの無い戦争のBGMを全身で味わいながら考える。

まあ、結論から言えば答えなぞ出ないのだが……いや、出るには出るのが。

俺がグズでサボりたがり仕事じゃなくてゲームがもつとやりたくて勢いで退職した結果じゃね？

と、自分に辛いものになるのでそこは直視しないように、考えから消すことで生きていくのだ。

これは……運がなかったのだ……

俺は長いものに巻かれてしまったのだ……

あんな無理やり……っ！

教育係十指揮官として我が社で任務こなせば、許す限りふかふかベッドでごろごろしながら寝てゲームと酒が飲めるって皆が言うから、必死に慣れない履歴書書いてグリーフィンに就職契約社員したのに……っ！

最初の数年は言われた通り、仕事をしつかりやっていけば認められ、【仕事くくく自由時間】でまさに天国だったのがいつの間にか……いつの間にか……ねえ？

命令されたとおり、己の技術を彼女達へ教え、共に訓練をこなし時々は実地訓練と言う名の実践をこなして行く。

そんな事をしていたら何故か彼女達から気に入られ、時が流れるほどに一人の時間は減って仕事の拘束時間は増えていく。

その結果、手続き書類やら上にあげる報告書類仕事やらが増え、何でか評判が上がり指名十彼女達に引っ張られて前線指揮官やら空から投げ出されて土壇場の増員として駆り出される。

一人で楽しむ趣味の時間もふと、気が付けば彼女達との時間へと代わり出す。

そして、あれよあれよと気が付けばドンドン自由時間と仕事のクソツタレタイムの比率が変わっていく日々。

まあ、なんだ。

今まで散々戦場で見てきた人形モドスクラップの無骨で渾名は生きた的。そんな旧世代のロボットな軍の物と違い、新世代の戦術人形達は正にウアレキユーレの様に美しく強かったのだ。

まるで最高級民生用自律人形と変わらない、最高の容姿に感情と己のコードネームを冠した銃を片手に戦う新たな存在である彼女達は。

無論、旧世代にもそこそこ使える人形も居たが、安心して背中を預けられるかと言えば疑問だろう。

其れに比べりや今居る彼女達は比べ物にならない位仲間として共に戦える。

この教育が楽しく無かったと言えば、NOと応えるだろうし、そもそもそれらが機密度も高い事もあつて気が付かない内に俺も熱が入っていたのだからね。

と、言うより一緒に働くならムサイゴリラみたいなオツサンや油臭いロボットよりもクツソ可愛い美少女の方が良いって男なら分かるだろ？常識的に考えて。

そういう国で生まれ、そういう趣味を齧つてた人間として美女と銃の組み合わせは至高つて分かるでしょ？常識的に考えて、な？

それで、熱も入つてたもんだからひつさし振りに慣れない努力を重ねてみた結果は悲惨なものだ。彼女達にする教育課程は無事修了し、それを評価されて褒美で休めるかと思いきや、残念ながら再度データ取りで遠方にあるゲームも酒も何も無い変態女の待つ

研究施設まで出張に激戦区へ派兵やらめんどくせー護衛任務と、仕事の量は倍プツシユ。

何だかんだ入れ込んでいた彼女達との仕事の代わりに差し込まれる仕事は、まるで使い捨ての便利屋さん扱いの様に扱き使われる日々であった。

勿論、書類仕事も比例して増えていく。

んで、そんな生活を一、二ヶ月程続けた折、今後の待遇の話となった為新しく配属されてきた七三分け養眼鏡上司と面談をする機会が来た。

これは褒められて頑張ったご褒美に休暇やら元の待遇戻りと思いきや……まさかの出向と来たもんだ。

今の任務はもう落ち着いたし、新たにとある組織で採用される同じく新世代の戦術人形T.I.D.O.Iの訓練してくれて。

んで、何もねー上に規制の関係でオンラインゲームも出来ない山奥訓練施設へゴーだよ。

この時あたりからもう辞めてやるぞーって公の場で叫んでいた記憶がございます。

勿論、行く前に異動の一件を話したら彼女達とゴタゴタにバキュンドガンと揉めまくったのはご愛嬌。

でもまあ、こつちも最初の数週間は天国だったのよ本当に。



与えられた個室にはオンゲは出来ずとも、ゲーム類は揃ってたし上等な酒も揃ってた。申請すりや安い奴ならきつちり届けてくれてたし。

新たな教え子達への教育も前の経験で得たノウハウ試してみたいとか、教育内容のオーダーも得意分野だったもんで楽しいもんでしたし。

彼女達は良い感じに実力が足りなかった。素ではかなり優秀だったのは間違いないし、既に実戦は経験済みだったのだろう。

とはいえ、だ。この教育分野ではまだまだだつて所。

だから、実力があるからこそ面白い反応して噛み付いてくるし、その上素体スペック高くて覚えはいいから教えがいがあったつてのもある。

そして、まだ素体の調整とかで俺が要らない時間が多かったもんだから、俺の求める念願の「仕事<<<自由時間」の比率で生活できましたしね！

しかも、ゴチャゴチャじやれて来る連中が居なくなつて、思う存分一人で自由な世界を味わえたしのう。

ああ、来て良かった……そう思つてた時期もありましたよ。これで二回目だね。

前と同じように共に訓練をして、時に厳しく、時に優しくそして丁寧己の技術を伝え、低強度の戦場に向かい実地訓練とそりや色々やりましたよ、ええ。

そしたらおかしーな、特に変なこととはしてない筈なんだけど気に入られました。

何時の間にか俺の趣味部屋酒とゲームに入り浸り、やつてるゲームを奪われて無理やり対戦ゲームを共にやらせられ、大切なお酒を遊びに使い、寝室も侵攻を止められず失陥しベッドを常に占領されるわ、衣装棚漁って服を隠されるわお菓子をばら撒くわで……もう、ね？

自由って何だろう、一人の時間を得るにはこんなに難しいものなのかと黄昏る位には落ち込んだというか疲れてました。

それで、教えてて気が付いたと言うか……

彼女達が調整する度に感じていた、いや察したというか……

彼女達の明らかに高すぎるスペック、ここで無い場所で見覚えがある奴が何故か居るとか教育内容とか考えてつなぎ合わせると、ねえ？

まあ、しゃべりたがり知りたがりは生き難い世界つてもんだから、明言は避けて惚けた知らない道化を演じ続けるけども。

この辺りから更にドンドン追加で内容が追加され、仕事が忙しくなるのと比例して彼女達と接する時間が増えていき、更に部屋への侵攻を許す悪循環へ。

まあ、それでも上手く仕事の時間を調節したり、二部屋ある事を利用した遅滞戦術や彼女達の中での真面目とサボりを上手く利用することで何とか自分の自由時間を保っていたと言う訳、なんだが事件が起こる訳です。

端的に言えば俺の趣味部屋が吹き飛んだんですよ、綺麗さっぱり。

こう、床からドカンって感じで。

たまたま俺はやる気になって、後回しにせず今日中に仕事終わらして翌日の余暇時間を増やすんだ……！と夜に部屋を抜け出して施設外の森訓練区画にある一角で訓練用のトラップとか色々準備の時間外労働してた訳です。

そしたらドカンですよ。趣味の物があるから頑張っていたと言うのに……酷い仕打ちとはこのこと。

そんなときや慌てて、酒もゲームとか消し炭となった物を補充申請とかしたのに今までと違ってずうううううと来ないし!!

もう、とどめって奴ですね。

てか、爆発の原因は地中に埋まった戦中の不発弾による事故って言うわりには被害は直上にあつた俺の部屋のみ。

んで、一応俺の個室って二部屋あつて片方が趣味部屋でもう片方の寝室の方は無事だったんだよね。臨時の1階建の建物なんだから、そこで砲弾スパークンしたら隣接してる寝室も無事とは思えないんだけど。

時間外労働行ってる間に起こって、帰ってきたときには既に処理も終わってたし、元趣味部屋は立ち入り禁止になっちゃってるし。

まあ、なんだ。改めて色々と考えて、あ、ふーん……つてなるよね。

そーして趣味部屋が消し飛んだ事により、一人時間は消滅。

まるで考えさせないかの様にクライアントからもドンドン仕事を押し付けられ俺の大切な時間は必然の如く。

【自由時間<<<仕事】になったのだ。

部屋が吹き飛んでからは、自由時間は完璧に消え去ったも同然なのだ。

我がラストふれいす寝室は彼女達が既に居付いてるし。

布団の中ぐるまっつてゲームしても、じいー、と布団越しやら隙間から見つめられてはやれる訳がない。

オマケに寝てる間もふと、気がついたら潜り込んでるからな。

ただね？

君達、寝てる間位は出力調整かけて欲しいの。

戦闘用に調節された君達の力で抱き締められたら、只の人間は死ぬと言うことを是非知って欲しい。

後、只の人間のところで鼻で笑ったり、不思議そうに首をかしげないで欲しかった。

お兄さんはそこそこ傷つきましたよ。

あ、まだ俺はお兄さん名乗れる歳だから、苦笑いは止めて欲しい。

んでなんだ。結局、色々疲れてたんよ。

組織の中とかダルいんよ。

主に報告書とか報告書とか補給手続き書類とか全般の書類仕事が。

後人間関係も。

元々、俺は自由大好きマン。

報告書などは毎日ひいひい作成する物では無く、一時的な雇い主に仕事の度に渡す分程度で良かったのだ。

ちゃんと口頭や写真等のデータを使って説明したり、一定以上のレベルで出来上がった物を引き渡せば、報告書とか簡易的な物でも向こう側が何とでもしてくれてたし。

また、グリフィンでは彼女達やカリーナや前の直属の上司、後は前線のおっさんズ位はそこそこ良い関係を築けてたとは思うけど、それ以外の人達は最悪だからね？

あー、今思い出しても割と本当に険悪でしたよ。

舌打ち、無視、書類の差し戻しと多岐にわたる嫌がらせの数々。

野良犬みてーな新人が突然に入ってきた挙げ句、重宝されてる上にそこそこの影のアイドルだった彼女達との仕事奪ってりや良い気分じゃねーわな。

因みに何だが、出向先では何かもう…辛かった。只只全ての職員に事務的に冷徹に対

応されて辛かった。

楽しい会話が出来たのは食堂のおぼちゃんとなたな教え子達だけでしたよ。

まあ、仕事も契約分は十分にこなし終わっていただろうし、教育も両方共にデータは与えたし、あそこまで出来れば十分だろう。

諸々色々危機感とかも感じるし、諸々話した結果のおっさんの反応とかも含め：  
まあ、うん。限界なのよね。

残りの期間は後数週間と言う話でしたが、俺本人が契約して進めた訳じゃないし別にええやろ！

そう判断した俺は、深夜に出向先の上司のデスクに一ヶ月後に辞める旨を書いた退職届けと、その脇に一度も使用した事の無い貯まりに貯まっていた筈の有給を一ヶ月分使用したいと明記した申請書を置いてくる事で問題なくここから退職したわけである。

勿論、俺の老家本元グリフィンにも発覚する翌日にあわせ、同様の内容を書いた書類を朝見つかる様に郵便で送ることを忘れはしませんでしたよ。

ダブル退職である。

ただ何故かその直後から悪寒が止まらなくなったので……

虫の知らせ的なのに従い、纏めておいた荷物を持って、その日の深夜中にはスタコラサッサしてきた訳である。

丁度、鉄血とか言う見知ってる軍需会社の工場とその製品が暴走しだしてこの地域大混乱だったし、グリフィンもその問題への対応と新たに任命された安全保障に追われており雲隠れするにはタイミングが良かったというわけだ。

で、当初はグリフィンは手当が良かった事もあり、過去の依頼成果報酬もどーんと来てたので過去最高の蓄えも出来てたし、仕事は数ヶ月は暫くしたくないので必要品やらゲームやら買い込んで……

任務中にたまたま見つけた素敵廃墟ぶれいすにて絶賛廃墟ニートぐらし！をしていたんだがなあ……

まさか差押えくらうとは思いませんでした。

ある日、買い物ついでにこそそとグリフィン支配地域にある市街地で金を下ろそうとしたら口座凍結されてましたの、恐らくグリフィンに。

笑えないのが、グリフィンに教えておいた口座だけではなく、別の隠し口座達も丸々凍結ですの。

お手元に残るは寂しい額ですの。

流石にろくな理由も告げないで疲れたんで辞めまーす！とだけ書いた退職届けとは言え、そこまでするのはひどいと思う。

何れにせよ、グリフィンが激おこプンプンなのは分かったし、教え子sな彼女達の事

を考えると何故か悪寒が止まらないので、グリフィン支配地域へは金も無いからそれ以降はあまり行かず、鉄血支配地域では下手しなくても死の危険があるのでこちらにもあまり行けず、結局、両者の間に広がる緩衝地域と支配地域の境ギリギリで生活しておりました。

そして、我が愛しのぷれいすはその緩衝地域にあったのだが……

ある日、元スーパーマーケットの残骸漁りや闇市での食料調達から帰ってきたら吹き飛んでました。

そのぷれいすはとある民家の地下室だったのだが、上にあった民家ごとさっぱり。

あれれ？おつかしーぞー？って三度見位そのときしたけど、事実は変わりませんでした。

……でも、元々上にあった家のパニツクルームとして作られていた地下室は家が吹き飛んでも大丈夫位頑丈に出来ていたし、そもそも入るには頑丈で重厚な金属製の扉を破らんといけない訳なんですよ。

それなりの量の爆薬でぶち破る必要がある位、がっちりしてて、錠を開けようにも電子錠とアナログ錠が標準で付いて、追加でロックを足したお陰でそこそこ頑丈な筈なんですけどね……？

しかし、無惨な姿となった扉の残骸に何故か解錠しようとして着いたであろう様々な



痕跡と、最終的にテルミットの的なので焼き切りブリーチングされてるような痕跡があるんですよ。

んで、内部も漁られた上で爆発の余波なのかは不明だけど、綺麗に消毒フレイヤされてるんですよね。

酒にお菓子とか無くなってるし、ゲームも無いし、目の前に燃え朽ちている衣装棚も漁られた様で中に入っていた筈の下着も上着も殆ど服無くなってるし、あの部屋の端にあつた筈の寝袋と高級モコモコふわふわ布団は丸ごと綺麗に消えてました。

ひえって、思わず悲鳴あげたの悪くないと思う。

兎に角、回収出来る分だけ荷物纏めて別のセーフハウスまで急ぎました。

そして、悲しきかな……そんな事が多々続きました。

新たなふれいすを少ない金で整える↓

居ない間or逃げてる間にふれいすへ襲撃受ける↓

荒らされて居られなくなる↓最初に戻る

正に無限ループである。数ヶ月の間に既に最低でも5〜8ループはしてると思う。

ふと、気がついたら俺はニートどころか廃墟路上生活者になりました。

そりゃ、毎回酒にゲームに衣類が無くなってりや金なんか一瞬で夏場のアイス並みに蕩けてなくなりますわ。

何とか維持はしている銃を片手に、新しく世界の敵となった鉄血さんの支配地域や緩衝地帯に潜り込み、出会う鉄血共を処分しては部品や廃品を残骸や廃墟から漁って毎日生きてます。

ご飯はレーションに保存食、後野草を漁って食べ、風呂は汚染されていない水を探して行い、ゲームは最後に残る携帯式のを噛み締めながらプレイしてます。

こんなに探されている以上

「勝手にそんな理由で辞められると思ってんの？」

そんな理由で辞められるのは死んだ時だけってそれ一番言われてるから。」

と言われているも同然な厳しい対応の結果、身も心も冷たくて辛い……可能なら暖かいグリフィンの生活に戻りたいです。

でも、もう書類仕事はしたく……したくない……です。

クルーガーのおっさん……そろそろ次の連絡下さい……私はもう限界……です。

ああ、拝啓お母様にカリーナさん。

俺はギリギリ今日も元気です。

## 0. 5頁目

彼との生活が楽しくなかったと言えば嘘になる。

最初は何故こんな奴が、とバカにしていなかったと言えば嘘になる。

野良の人間ごときの傭兵に、私達の様な戦うために調節された戦闘機械が負ける筈がないと。

私は、人間を遥かに越える力を発揮する機械の体を持ち、様々な状況において外部からの操作を必要とせず、自立戦闘をもこなす高度なAIを搭載する事によつて、自ら考え、動き、与えられた任務と銃を抱え戦場を飛び回る戦術人形。

彼は人間で、経歴だけ見ると有能とは言えるだろう。

しかし、義体化もしていなければ電脳化すらもしていない。戦闘用義眼とそれを利用する為に脳に埋め込んだインプラント以外は全て生身。

只のデータ取りに一時的に雇われただけの傭兵だ。

戦う為に作り出された私達は製造時には、戦闘マニュアルやサバイバル知識や戦術、過去の戦史と言った各種データは既に電脳へインプット済み。

私達は生産直後の右も左も分からない生まれだての赤ん坊つて訳でもない。それぞ

れなりに実戦と言う生の戦闘を経験してきた……戦術人形なのだから。

特に私はそうだろう。今はこんな所にいるけれど、あれだけの組織の中で勝ち抜いて生き残って来たのだ。義体化すらしてない生身の傭兵風情に戦闘の事を教わることなど何もない。

そう食って掛かって行ったのは今では記録に残すべき思い出の1つと言うのだろうか。

まあ、結果から言えば、ボロボロに敗けたのだけだね。

何度もトライしてはポコポコのボロボロのプライドズタズタにされて、高くなつてた鼻を折られ、私達は彼から必要な知識や手段を教わり、最終的に指揮に従う様になつただけども。

そんな彼と少しずつ接し、短くない時を過ごし、教えを請い、戦場で背中を預けて共闘と沢山の出来事が起こっていく中で——何時か何かしらの形で別れは来るだろうとは思っていたし、理解はしていた。

でも、こうして実際に起こってみると。

私が想定している以上に実に恐ろしい事態ではないか。

そのときに備え、色々と暴走しないように何種類も対応策を作っていた筈なのに。

それを嘲笑うかのように私の感情プログラムが停止しては再起動を繰り返し、堂々巡りの計算をし続けてはメモリーの海のあちらこちらを駆け巡り、エラーと言うエラーを蓄

積し続ける。

人間らしさを追い求め、そして作り上げられた私のボディーがそれに反応するかのよ  
うに表情を歪め、震えを起こす。

それらに対し、中斷命令もシステムそのものを再起動しても通じない。

瞬時に一部のシステムを落とし、一時収まったとしてもまた「彼が居なくなつた」そ  
の情報に触れた瞬間暴走を始める私の電子の脳<sup>A</sup>。

ドンドン貯まり駆け巡るエラーログを精査していく中でこれが人間の言う動揺なの  
か、と下らない思考が流れ溶けていく。

改めて、彼が何時か私の前から居なくなると言う事実を理解はしていたのだ。

この時間が何時までたつても続くとは考えてはいなかつたのだ。

でも、だからと言って理解しているのと納得しているのは別物だ。

頭では理解していても、私はその事実<sup>A</sup>に納得など出来なかつた。

認めたくはないし、認める訳にもいかなかつた。

ふと、私は気が付けば、彼の教えの元で色々<sup>A</sup>とこなすのが当たり前になつていた。

ふと、私は気がついたら、彼の指揮を信賴して動くようになっていた。

ふと、私達は気がついたら、彼の部屋で遊び、話すようになっていた。

人類人権団体の奴等は、この私達の感情について全てまやかして所詮機械の真似事

だ、とあざけ嗤うだろう。

私達に付く電腦整備担当の連中なら珍しいバグが発生しただけと対処し、データを残した上で事務的に処理を行うだけだろう。

私だって昔ならそう結論を出した筈だ。

所詮、高度に組まれたAIによつて自ら考え動くことが出来るとは言え、只の戦闘用に組まれた機械は所詮、機械なのだから。

このエラーを吐き続ける感情プログラムだつて擬似的に人間らしさを出すための必要な計算の上、大本の思考プログラムやら疑似感情ソフトウェアが動いているだけなんだつて。

でも、今は「違うんじゃないか」

そう思える私が居るのだ。

機械だつてそんなのを越えて、別の機械や生き物と言つた存在に対し、外部からの影響無しに信頼し親愛を持ち、特別な感情を得られる様になるんじゃないか、つて。

だから指揮官。

貴方が辞める事は許されないと私は具申する。

だつて、こうなつてしまった責任を取るべきだ。

私だけではなく、他の皆も同じ意見みたいだし。

後、辞めるにしてもそんな理由で、何も言わず唐突に辞めていくのはおかしいでしょ？

私達をそんな理由で置いていき、捨てていくのは絶対に許さない。

前は上から派遣されてきた連中が貴方の趣味を、場所を壊しちやっただけど今の私達は違う。

確かに一時的に貴方との時間が増えて私達は嬉しかった楽しかった——その代わりに貴方が消えた。

だから——私達は反省したの。

貴方が帰って来て、喜んで貰えるようにあの場所を整える。

貴方が帰ってきたくなるように貴方の好きな物を揃えておく。

貴方が外へ出ていかないように、また辞めないように外にある貴方が好きな物は、此方に全て集めておくから。

だから、後は貴方を探して迎え入れるだけ。

指揮官。あの娘、ナインが言う通り私達は家族だから。

その為になら障害くらい乗り越えてみせる。だから、絶対探して見付け出して動けない様に簀巻きにしても連れて帰るからね、指揮官？

## 2 頁目

ボリボリボリボリ

只々無心で壁を見つめながらポロポロのソファアに座り、カロリーバーを齧り続ける。

味も糞もへったくれもない大味なチョコの雑な風味に飽き飽きし、口中の水分を吸いとってからじゃねーと行かねーぞと口内に残るカロリーバーを無理やり喉奥へと押し込む……が、流石に辛いので置いてある水筒を掴んでぐつと口に含み、水で流し込むようにして最後の欠片を胃へと仕舞いこんだ。

本当に嫌になるね。

早く暖かい飯が食いたい。

残念ながら今はヒートパック何ぞ、便利な物は品切れだ。

だから暖かい飯を食べる、その為には火が必要だが、火をつけたら最後——燃え出る煙と熱反応で位置がバレて、あの世行き確定だろう。

俺のいる廃墟ビルを囲むクソツタレファツキン鉄血供の手によってな！

戦場で物資をがさごそ漁る浮浪者生活して居る以上、そりや危険と隣り合わせと言え



ど、まさかこうなるとは思いませんでした。

スカベンジング中、嫌な予感がする音がして、チラリ外見てみりや俺のいる廃墟ビル  
区画中心に鉄血の奴等が展開してきてると来たものだ。

オーマイふあつきゅー。

思わず、頭がくらりと来ましたよ。

奴等と出会う度にリスクに釣り合い、可能ならば葬り捲つてるとは言え、流石にガチ  
で殺しにかかられるほど脅威度稼ぎ行為はしていない。

精々ブンブン視界の端の端で飛び回るハ工程度のウザさ位だと思っておりますし、俺  
もバレたくないの足が着かない様、ずっと空を飛んでいたと言うのに。

動き見る限り、明らかに何かしらの目的をもって探している様子。

規模はざつと掴みで一個小隊前後。

装備もそこそこ良い個体が一個分隊に数体必ず居るし、内一個分隊は丸々明らかに  
フアツキン装甲野郎だ。

俺の装備はアサルトライフル一丁にサイドアームにハンドガン一丁。

弾は30連が刺さってるの含めて五本、20連が二本。バラ弾もそこそこあるにはあ  
る。

後は手榴弾四発、フラッシュ一発にスモーク二つ。

アンダーバレルにグレネードランチャー<sup>G P 1 3 0</sup>が付いているとは言え、手持ちの40mm弾はたったの二発。

はい。絶対足りませんし、火力負け甚だしいです。

明らかに正面から戦っても即死です。本当にありがたいがとうございます。

まあ、脱出しようにも周りにろくな退路はないし、完全にわらわらと包围されててどーしようもないのでビルの中で不貞腐れてました。

既に包围されて丸一日がたっている。

朝ここに来て、ガラスのなくなった窓から太陽が沈むのをぼおーと眺め、また上がるのを見てました。

流石に朝になり腹が減ったので、火が使えない時用ゲロマズ食いたくない飯ランキングTOP5に入るカロリーバー(チョコ味)を食べてたと言う訳だ。

せめてフルーツ味なら救いがあった。

まあいい。しっかし、連中の目的はなんだろね。

最初の数時間は策敵と搜索をしている動きをしたが、夕方位から明らかに待ち伏せの態勢に入ってるからね。

少なくともターゲットは俺じゃない。

明らかに過剰すぎる戦力だし、動きから見てもね。

するとこの態勢から見て、何かがここを通るのを殺るのが目的かな。最初の捜索は恐らく情報鮮度が悪かったのだろう。

逆に待ち伏せ食らわれない様に動いてたつて所が正解かね？

ここは両者共に支配率も有利なものもない緩衝地帯。

目の前は十字路で、俺が今居るようなボロボロ雑居ビルに倒壊した民間やガソリンスタンドのようなお店が並ぶ正に元極一般的町並みだったTHE廃墟の市街地。

交差する道路は片道一車線で路上は放置車（廃車）に残骸で遮蔽物ばかり。

兵員輸送タイプの装甲車は通れないし、車両に関しては軍のホバータイプの戦車でもなけりや進むのは無理だろう。

あ、因みに十字路の北に行けば鉄血占領地行き。

南に行けばグリフィンの支配地域行きとなっております。

どっちも行きたくないねえ。

尚、俺の居るビルは十字路の北東側に建っております。

そんでそんで、さつきから窓から覗けば嫌な様子が義眼の拡大レンズ越しに良く見えますよ。

向かいの屋根が崩れた三階建てのアパートには窓から機関銃備え付けてる様子がバツチリ。

通り挟んでその左側<sup>北西側</sup>、六階建てのビルには狙撃ポジションを探しているスナイパー<sup>J a e g e r</sup>複数にビル一階部分に隠れるかのように装甲野郎<sup>A e g i s</sup>とノーマルの敵ががうじやうじや。

勿論、アパートの通り挟んだ右側<sup>南東側</sup>の元コンビニらしき建物にもノーマルの敵がわらわらである。

その平べったい屋根に登って構えてるマシンガンナー<sup>S t r i k e r</sup>も二体も居やがるし。

んで一個分隊程度がその中心である交差点付近に向かい、放置車両やら残骸やらに近づいて何かしらの作業をしているみたいである。

まあ、大概は地雷等のブービートラップ仕掛けてるんだろと、容易に予想がつく。

取り敢えず、今のところ俺の居る四階建てビル周辺に敵は居ないようだが、明らかに十字路付近に来る敵へのK I L L Z O N E構成してますね。

敵の配置を見る限り、獲物は鉄血側<sup>北側</sup>から家<sup>南側</sup>へ帰ろうとするグリフィンの人形達もしくは軍のリコン<sup>偵察</sup>つて所かな。

トラップに引っ掛かった所を二方向から機関銃で鉛のシャワーを浴びせ、プレッシャーをかけることで北側に下げさせる。

そして、南側に意識が向いてがら空きの背中をスナイパーがズドン。

次いで退路をたつ形で装甲型を押し出し、最後は南と北側からサンドイッチして終わりつて所かな。

あー、これ引つ掛かったら壁になれる機甲戦力があるか、数居ないと終わりだ。少数なら手酷い被害を喰らって壊滅判定。

酷けりや文字道理全滅するだろうねえ。

こんな手が込んでるってことは下手したら迫撃砲も二門くらい居るんじゃないか？

あくまで予想だけど。

うーん、これはマジ余裕で死ぬ。巻き込まれるのは勘弁ですよ。

とは言え、さつきからチヨロチヨロと複数の索敵巡回が回っている性で逃げるに逃げられない。まあ、逃げようと思えば出来るのだが、リスクが高い。

作戦 ↓いのちだいじに

で、行くならば。

全てが終わるここで大人しく待つか。

鉄血連中がお食事に夢中の間を狙って逃げるか。

この二通りの回答しかないだろう。

……まあ、なんだ。

この狙われた獲物が軍のリコン連中なら心底どーでも良いのだが、もしグリフィンの人形達だったとした場合、このまま殲滅されるのを見て見ぬふりするのは朝の目覚め

が悪くなる。

明らかに人形達が引つ掛かったらほぼ助からないからな、これ。

うむ、どうしたものか。

何とかして伝えんと哀れな屠殺場の獲物になってしまう。

かといって、持つてる広域通信機で通信電波なんか出したら即バレて周りの連中にビルごと吹き飛ばされかねない。

しかし、戦闘が始まってから援護にいつてもその時点で既に助からんし俺も死ぬ確率倍ドンだ。

……結局、無茶する羽目になりそうだ。

俺もまだまだ甘い、そんな感傷染みため息をつけて立ち上がり、動く準備を始めた。脇へ下ろしてあったバックパックをどっこいしょとソファに持ち上げて、ガソゴソと防弾プレートと弾薬、ヘルメットにその他道具を順番に取り出しては脇へ放る。

一旦脱いでからプレートキャリアーに既に入っていた薄い金属プレートを重ねるようにしてしまっていたプレートをサクサク差し込んでいく。

持っている軽量セラミックはこれでカンバン。

弾を食らって割れたら、糞重い金属プレートに逆戻りだ。出来れば被弾したくないね。

最後にヘルメットへと戦闘用ヘッドセットやらシールドバイザーやら戦闘支援用のパーツを取り付けて終わり。

後は選別。悲しいがこれから走り回るのに重りは不要。

なので、本日のゴミ拾いの成果を捨てていくしかない。

高く売れるチップにパーツ。後は食料の缶詰少しだけ。残りの成果物は部屋の端にポイだ。

命とこのビルが全て終わった後に残ってあれば改めて拾いに来れば良い。

バックパックを小さく纏め、成果品のつまったケースやら前準備終わった爆薬やら詰め込み口を閉める。

次は敵の装甲持ち用に弾込めの時間である。

弾薬ケースから取り出しておいた、ホットロード仕様のAP弾を空の五十連ドラムマガシンにローダーを使ってパチパチ無心で積めていく。

常時使っているAP弾よりも弾芯に良い金属と表面皮膜を使ってるせいで出費の嵩む高い弾であり、出来ることならあまり撃ちたくはない。

撃つ機会来ませんように。

そう願いながら嵩張るドラムマガシンをこれ専用のマグポーチへ仕舞いこんで体に取り付けた。

そして重くなったプレートキャリアーとヘルメットを着用してから、後ろの首元に半円の形をした戦闘用小型コンピュータを取り付ける。

これさえあれば、義眼やヘルメットバイザーを通じて情報が投影されるようになる優れものだ。

簡単に言えば、視界の端にマップやら体の状態やらが常に見えるようになり、それ以外にも義眼と連携して狙撃に必要なデータや計算を可能とする機能がある。

更に電腦が無い俺は、本来ならば人形が利用する暗号通信とは会話が出来ないが、専用の無線機をこれとリンクさせれば会話が出来るようになるとかね。

他にもまだ機能はあるが、割愛する。

何れにせよ、便利で今の時代には欠かすことが出来ない電子装備と言う訳。

その後、ピツピツピツと操作をして無線機にヘルメットのパーツ。そして脳味噌に埋まってるインプラントと接続。

ヘッドセットと義眼に無事接続が完了した音声と表示が流れたことを確認し、義眼に入っていた地域状況データをコンピュータへ送っておく。

後はマガジンに手榴弾やら諸々マグポーチに差し込んで体の方の準備は万端。

コンピュータの方でマップピングデータが作られるまでに銃の方の準備をしときましよう。



テーブル上で横たわる今の相棒とサイドアームのG19を手に取り、両方のマズルにサイレンサーをクルクル捻って取り付ける。

G19の装填確認をしてからホルスターに仕舞い、相棒を抱えホロサイトの電源を入れて各部の微調整に再確認。

そして弾を抜いておいたチャンバーへ再度弾を入れて、テーブルの上に用意しておいた三十連マガジン手に取って差し込めば銃の方もバッチグー。

すると、ピコンと視界の右端にマップデータ作成完了の通知が表示された。

データを広げて問題がないことを確認。

最後の最後にバックパックを背負って準備完了だ。

改めて外部を確認すれば、お外のにいる敵さんの作業は終わっていたようだ。

ガチャガチャ作業音と移動音が響いていた廃墟には、元の平穏が戻っていた。

同じように準備完了の鉄血共はバレぬよう息を殺し、今か今かと手薬煉引いて獲物を待ち構えているご様子。

さあ、出撃の時間だ。

腕や頭をぐるぐると動かしてみれば固まっていた関節がコキコキ良い音を鳴らしながら伸びていく。

片手で銃をブラリ携え、部屋の外へ歩み進む。

さーて、頭使って死なない程度に元氣一杯で頑張っていきましょーかねえ。

## 3 頁目

「……ふう、さっきので敵は最後かな？」

その言葉とは裏腹に、カバーから二つの銃口を敵が居た方向の物陰に向けながら仲間へと問いかける。

「みたい、ですわね」

廃車のエンジン側に隠れつつ、回りを伺っていた仲間がそう答えた。

「じゃー！一先ず、リロードするからそれまでは警戒宜しくね」

「はいはい、私は大丈夫ですから早くしてくださいな？」

「分かってるよ！早くするってば」

そう返しながら、カバーへ完全に身を隠し、片方ずつ中身の減ったマガジンを変えていく。

同時に戦闘記憶ログとダンプポーチを手繰りながら残りの弾数を弾き出す。

もう満タンのマガジンは少ないなあ……

「StG、リロード終わったよー。ありがとーね」

そう呼ばれた少女は少しだけずれてしまった帽子を直し、艶やかに流れる金髪を整え

ながら立ち上がった。

「スコープオン、じゃあ行きましようか。……はあ、其れにしても服が汚れてしまいました」

「にやはは、結構撃ち込まれたもんねー？それと、そんなに汚れてないし気にしなくても大丈夫だって！」

「私は！気にしますの！ああ、もう。早く洗いたいですわ……」

本当に綺麗好きだなー、スリングで銃を背中に回し服を出来る限り綺麗にしようとしてるStG44を見ながらそう改めて思った。

「一先ず、済んだ事だしペーペーシャに連絡いれちゃうね。お魚さんも不安がつてるだろうし」

「お願い致しますわ。私は今の内にダミーを集めておきますから」

「はいよー……じゃつ、暗号通信始めるね」

私達戦術人形には、人形同士での通信が出来る広域通信機能が搭載されている。

通信機や衛星の補助を必要とせず、人形のみで運用可能なシステムであり、距離が離れていてもかなりの広範囲で交信が可能である。無論、支援機器を使えばより幅は広がる。

後はこれを活用して指揮官からの指揮も受け取ったりも出来たりと結構使い勝手の

いい良いシステムだ。

今はその機能を使ってペーパーシャへ連絡を取ろうと言う訳。

左手に収まる銃をホルスターへしまつて、電脳内で暗号化の演算処理をしてから通信を繋ぐ。

「此方、スコープオン。聞こえますか？」

数秒間、無線のノイズが聞こえ——ピピツと電子音が耳を叩く。

無事、繋がったようだ。

『此方、PPSh-41。キッチンと聞こえていますよ』

「私とStG共に本体の負傷無し。遭遇した敵を全て撃退。

ただその代わり、私の最後のダミーがやられちゃった」

その台詞にジト目で睨んでくるStGの目線を背中に受けながらペーパーシャへ報告をする。

『スコープオンさん、また無茶したんですか……？危ないですよっ……』

「へ、へへ！でもタダでやられた訳じゃないんだよ？

持たせた手榴弾で敵を一緒吹き飛ばしてやったんからセーフだよ、セーフ！」

『でも、気を付けて下さい……ね？ もしもの事があつたらみんな悲しいんですから』

本当に心配そうなか細い声に、私の疑似感情がズキリとまち針が浅く突き刺さる、そんな感覚に襲われた。

「ご、ごめんね……でも、結構ダミー被弾しててこれ以上持ちそうに無かったし、このまま失うのも勿体なかったから……」

あ！え、と。そ、それでそっちは問題なし!？」

『……もう。えと、此方は問題ありません。お魚さんも元気です。お二人が引き付けてくれまたお陰です』

「なら良かったよー！取り敢えず、集合地点Cに十五分後に集合ね……あ」

「ねえ、StG！残弾は大丈夫ー?」

後ろを振り向いて見れば、二体のダミーを集め終わったStGがマグポーチの中にあるマガジンを整理している所だった。

「ダミーも私も残り半分つってところかしら?」

「そっか、ありがと——って感じらしいけど私は3割弱しかないから、集合したらマガジンへ弾込めしていい?」

『此方は問題ないですよ。』

じ、じゃあ十五分後にまた会いましょうね!」

「はーい、また後で〜」

プツリ、ペーパーシャとの通信が切れた。私達が敵を引き付けたお陰で向こうは被害無し。

連れて帰るお魚も問題無さそうだ。

「通信、終わりました？じゃあ、早く集合場所に行きましょうか」

「分かっているって。……あ、もうダミー居ないから援護宜しくね」

「はいはい。一体常に回しときますから、精々弾を食らわないように跳ね回って下さいな」

プスプスと火花と煙をあげる敵の残骸を尻目に、道の右側へよって曲がり角、ビルの入り口や廃車などのそこら辺にある物陰を警戒をしながら、それでいて素早く目的地点へと歩みを進める。

「……クリア。渡って進んでいいわよ」

側道へと、索敵に向かわせたダミーの情報を受け取ったStGが肩を叩きながら私に伝える。

「は、い、よー」

シユタタツと素早く、そして足音は殺しながらダミーと共に渡り、身を隠せる遮蔽物を確保してからStGが渡れるように援護へと動く。

チラリと目を合わせ合い……少し間を置いて同じようにStGも渡ってくる。

「問題無しだね、早くいこっか」

「ええ。でも……やっぱり市街地は嫌ね」

チラリとSttGは崩れかけた雑居ビルや商店、それに道に朽ちる車両へと目を向けながらそう、眩きため息を漏らした。

「まあ、私達は護衛抱えて帰る身だし隠れる所多い方が助かるけど……」

警戒すべき所多すぎて実際疲れるよね、本当に」

お互いに愚痴りながらも足は止めない。

実際、見るべき所が多すぎてどうしようもないのが市街地戦だ。

下手な例をあげるなら。

隣同士の部屋に敵が居る事に気がつけないで、部屋を出た瞬間にお互いびつくり鉢合わせ！

何てことが普通にあり得るんだから怖い。

スナイパーもトラップも潜み放題。

見る所全てが怪しくて危険で……

ひたすら警戒しててもあらぬ方向から不意討ち、曲がり角で予想外の接敵。

そんな言葉で埋まってしまるのがコンクリートジャングル——市街地戦の怖さだ。

「所で、スコープピオン？ 貴女残弾三割って言ってましたけど……」



もつと狙って丁寧に撃ちなさいな。流石に無駄弾多過ぎよ?」  
うげ、まーた始まった。

「別にいいでしょー? てか、私の武器サブマシンガンだし、狙って撃つ武器じゃないんだから。」

バラ撒いて牽制して……最後に接近して弾を土手つ腹に叩き込む武器なの〜」

「に、しても! 無駄弾が多いと言ってるんですわ。当たらないって分かっている牽制射撃にも拘らず、過剰なほど叩き込むんですもの。」

特に貴女の銃はRPM発射速度が高いんですから気を付けなさい?」

「う、……分かったよ、顔近づけないで怖いからーこれから気を付けますー!」

ズイツと鼻がくつつくほどに、私へ近づけてきたStGの顔を押しやってどかす。

たく……全く美しくないとか、そんなの気にしないで良いと思うんだけど。

しょうがないじゃんか、両手からブツパなすの楽しいんだから。

「何か言いました?」

「べつつにー? ……あ、集合地点見えたよ。次の通り越えたら到着だね。待つてるだろうし急ごつか」

「……はいはい。今ダミーを回しますわ!」

隊列の先頭に居たダミーが通りの角へ向かい、そして覗きこんだ。

「どう?」

「……問題無さそうですわ」

「じゃ、お先」

二車線のそこそこ広いはずの道をを塞ぐようにぐじゃぐじゃで転がる廃車の間をすり抜けながら私と一体のダミーが対岸へと渡った。

十秒前後、様子を見てから同じように StG も渡ってくる。

そこから少し歩くと、集合地点に指定しておいた五階建ての雑居ビルへ到着した。

「うん、時間ピッタシ。二人はもう中かな?」

「お二人の方が位置的には近かったですし、そうかと」

また、通信をペーパーシャに繋ぐ。

「此方、スコーピオン。」

目的地についたよ、二人はもう中に居る?」

今度も数秒の雑音の後で直ぐに返事が帰ってきた。

『此方、ペーパーシャ。』

既に三階、一番奥の部屋の 305 室に居ますよ。窓からそちらを確認しています。ど

うぞゆつくりお入り下さい』

「うんうん。じゃつ、通信切るね」

後ろを向いて、通りやビルへと警戒をしていたStGへ声をかける。

「それじゃ、中に入ろうか！」

「了解ですわ」

入り口の観音開きの扉をギギイと押して中へ入る。

ロビーには砕けたコンクリートや調度品が転がっている。

ここはマンションだったみたいで、ガラスの砕けた受付に沢山並ぶ郵便ポスト。片方のドアを失い、動くことのない箱がチラリと見えるエレベーター。

それに割れたオートロックの残骸、と。

正に廃墟って感じ。

「うう、埃っぽい……また汚れちゃいますわ……」

「もう気にしてもしょうがないと思うけど……」

小話しながらカツカツと階段を上がって三階へ。

廊下は開放的ではなく、壁と窓は打ち付けられた木の板で光は遮られ薄暗い。

時々、砕け落ちた破片を蹴り飛ばしながら一番奥の部屋、斜めに落ちかけの305が掲げられた部屋の前で止まる。

「……だね」

コンコン、とノックをすればパタパタと言う足音がした後、扉が空いた。

「やあ、さつきぶり」

「お二人共に無事でよかったです……あ、どうぞ中にお入り下さい」

ギツ、とペーパーシャがくすんだ金属の扉を一杯に開けて私達を向かい入れる。

「これはどうも。さて、お邪魔するわよ？」

とか

「お、開いてんじやーん！ここがペーパーシャさんの引越先か〜」

二人で軽く冗談やお礼を言ってから中へ入る。

ペーパーシャもクスリと笑いながら、汚いところですが、そんな返しをしてくれて扉を閉めた。

ビルの汚さと言うか、外見の割には広かったようで。

1DKの間取りの様だ。

「玄関を土足のまま上がり、スライドドアを一つ開けると、そこには二体のペーパーシャダミーと椅子にちよこんと座って待っていたお魚さんこと——護衛対象のSPP——が居た。」

「あつスコープオンさんにStGさん！無事でありよりです」

キラリと嬉しそうな笑顔を見せて、SPPが此方へと顔を向けた。

「へへん、あれくらい何て事ないって！」

「……その割には最後のダミーを失ってるわよね？スコープオン？」  
ギクリ

「えっ、それ大丈夫なんですか？」

「この娘、無茶してダミー突っ込ましてボロボロにした挙げ句、最後は敵とダミー共々手榴弾で汚い花火をあげてきたのよ」

「あっ、ちよっ！」

「一緒に爆発させたんですか!？」

「みたいですよ……？」

さつき通信越しにスコープオンさんから私も聞きましたから」

折角かっこいいって言われたかったのに！

二人がニヤニヤしながら……特にStGがSPP-1へあらましを説明していく。

「スコープオンさん……流石に危ないですよ」

「いや、しようがないって！もうボロボロでダミー持たなかったんだし……」

「それに絶対それ、スコープオンさんの指揮官に叱られますよ？」

SPP-1の言葉でうぐっ、と狼狽えたところにニヤリと笑いながらStGが追撃をかける。

「壁として使うダミーとは言えそんな使い方は叱られて当然よ？ねえ、ペーパーシャ？」

「えっ？あ、はい。そうだと思います。ダメも安くないですし……」

「少なくとも整備班と補給係と指揮官から叱られて報告書兼始末書位は書くことになるのでは無いでしょうか……？」

え、マジ？ そんな感じで皆一人一人へ顔を向けるけど……

「ひえっ、始末書はめんどくさいからいやだー！」

「あはは……ドンマイです。始末書はスコープピオンさんには向いてない任務かもしれないがせんが頑張るしかないですね」

「自業自得じゃない……あ、ペーパーシヤ。その時、貴女は手伝いしちやダメよ？少しは痛い目見ないと反省しないから」

「え、あ、分かりました。スコープピオンさん、ごめんなさい、ね？」

絶望である。助けはなかったのだ！

「……さて、冗談はここで止めましょ。

早く弾込めとブリーフィングして、グリフィン支配地に向かきましょう。私も早く帰ってお風呂と服を洗濯したいんですもの」

「それは私も同じですね！SPPー1さんを無事に返す、指揮官様から預けていただいた重大な任務ですもの……」

「終わったその後はのんびり休みを取りたいです」

「私も潜入で疲れましたし、同じ意見ですっ」

じゃ、とつとと取りかかった方がいいね。

「じゃあ、申し訳ないんだけど……」

あるだけ弾をマガジンに再装填するの手伝ってもらっても良いかな……?」

「私達二人は既に終わっておりますし、このペーパーシャ、お手伝い致します」

「私にも任せて下さい」

「お二人はスコープピオンのを手伝ってあげて下さいな。私は私自身のをしてしまいますから。」

あ、ペーパーシャ。私の一体玄関の外に半自立モードで哨戒させますわ。貴女は窓の方を」

「了解です、StG」

「二人ともありがと!じゃあ、やっちやおうか!」

バックパックとダンブポーチからAmmoBoxに入った弾とマガジン、そしてローダー三つをテーブルへと出す。

「これだと…6本と半分つてところですか?」

「うーんと、まあ、取り敢えずマガジンに入れてちゃって!殆ど空のはこつちに!」

最後に余ったのから弾を抜いてから纏めて一本にいれて、空のは数本持ったら後は捨

「ててちやうから」

皆がローダーへと弾を着け、マガジン内に押し込んでいく事に集中する。

とはいっても、手慣れた作業だ。

ガチャガチャと作業音を部屋に響き渡らせながら、素早く弾を込めていく。手慣れた、そう言ったように私達も慣れたもんだから10分もたたずに作業を終わらせる事が出来た。

「こつちも終わりましたわ」

「無事かなりよー！二人ともありがとーね！」

あ、StG。私のは5割程度まで戻ったけど、そつちは？」

「元々そんなに予備持つてきてませんし、精々6割半程度つて所ですわね」

ペーパーシヤやSPPP-1の残弾も5割程度つて弾込め中に聞いたし……

うーんまあ、大丈夫だとは思うけど。

「やっぱり、結構消耗してるね」

「そこそこ戦いましたからねえ……」

でも、残りの距離的に考えても約束の時間までに余裕を持って回収地点まで行けますし、戦闘を極力回避すれば問題ないかと」

「そうですね。探知能力の高いSPPPさんもいらつしやいますし。難しくはないですよ



う。

先程は奇襲に気がついてくださってありがとうございますわ、SPP」

先程の敵はSPPがギリギリで察知してくれたことによつて不意の戦闘にならずに済んだ。

でもビルの中に、鉄血の人形と機械兵器が潜んでるとはねえ……

「いえ、気にしないで下さい。」

私は戦闘面ではあまり役に立てませんから、得意な任務で成果を見せないといけません」

「さて。じゃあ、改めてルートはどういたしましょうか？」

その問いかけに各自、電脳内で共通の地図を広げながら考える。

「でも、事前に手に入っていたマップ。ピングデータと変わってましたね……」

「そうね、ペーパーシャ。特に道中のビル何か所かは倒壊してしまっていて、通る予定だったルートが駄目になってしまいましたし」

「あー、あのビルが倒れてなきや今頃はゆつたりのんびりグリフィンで休養出来てたのに」

「三十階クラスのビルが完全に倒壊してたせいで遠回りせざる得なくなりましたもんね」

「だよなーSPPP? あれは本当に予想外だよ。」

てか、このデータ今のところ信用ガタガタ何だけどこれ、鮮度古いの?」

「二応、出発一ヶ月前に取った衛星写真とUAVの観測データを元に作成したらしいですわ。」

とは言え、最近鉄血も活性化していてこの地域もかなり荒れたそうですから、その影響だとは思いますが……」

— 電脳内のマップングデータに事前のルートがすうーつとと引かれていくが、道中で幾多の×マークがそれへと重なり、刻まれていく。

そこそこの所で倒壊なり、事前データと違う状態になっている場所だ。

「最近、あんまりいい話聞かないもんねー?」

さて、無駄話はこの辺にして。当初のルートはダメそうなんだっけ?」

「はい、先ほど確認はしたのですが……」

やはり、一部建物が倒壊してしまっていてスナイパーが潜んでいる危険性が高いかと。先ほど含め、既に三回も鉄血の哨戒部隊とも遭遇したこともありますし……

時間はかかりますが、より安全なルートを取るべきだと私は思います」

そうすると、ペーパーシャによってまた別の線が地図へとスルスル引かれていく。

「このルートだと予定の三ブロック隣を通る感じになるのかな?」

「はい。時間は一時間半程余計にかかる予定です。現在時刻は午前11時。道中で迂回や戦闘など余計にかかったとしても、午後5時前後には到着いたします。」

回収時間は午後5時半ですから余裕はありますし、此方の方が平屋の建物が多く、地形的にも不意打ちも避けやすいです。

また、足元には比較的太い下水道が通っていますから緊急時にはそちらを使って離脱できます」

「私は絶対そんな緊急時来ないことを祈りますわ」

「SttGさん汚いの嫌いでもんね……」

私も流石に……水中専門とは言え、下水道はちよつとなあ……」

まあ、私も勘弁なのは同意する。

既に暫く人は住んでいない地域だし、未だましだとは思うが。

「ペーパーシャさんの奴が順当って所かな？」

「ですわね。SPPは何か意見あるかしら？」

「私は戦闘はからつきしですし、その辺りはお任せいたします。でも、このルートは退路も確保しやすいですし問題はなにかと」

ペーパーシャは私達三人を見て、ほっとした様子だった。

「じ、じゃあこのルートで行きましょう。」

時間も勿体ないですし、そろそろ動きますよ」

その言葉で皆が火が入ったエンジンの如く動き出す。

装備を整え、いざ戦場へ。

先頭と最後尾にStGとペーパーシヤのダミーを置いて、真ん中に私達を配置する。

何かあったときには私はSPPを庇いつつ行動し、他の二人はダミーを囷にしてカバーするなり、一緒に逃げるなり反撃するなりしていく形だ。

護衛対象のSPPを隊列の真ん中へ置いて部屋から飛び出す。外からの狙撃を警戒しつつも軽快な速度で一列になって進んでいく私達。

慎重にビルの扉を開けて、外の世界へ。

警戒をして進み、お互いにカバーをし合いながら慎重に設定したルートに沿って歩みを進める。

「……クリア。ペーパーシヤ」

「りよ、了解です」

路地や交差点が来れば、その都度死角に怯えながら覗き込み安全を確保する。それを繰り返し行う。

何度も言うが、やはり市街地は怖い。

全力へ反対のビルの壁まで駆け抜けて、自身が無事だった事にほっとしているペー

ペーシャの様子を見ながらそう思った。

「次スコープオン、SPP行きなさいな」

「はいよ、じゃSPP?」

「タイミング任せます」

いくよ、声をかけてから一緒に遮蔽物の無い交差点を越えていく。

もし、ここでスナイパーに撃たれたら。

嫌な考えが常に頭に引つ掛かり続ける。

身を隠すものはこの交差点には何も無い。被弾で行動不能になってしまえば……終わりだろう。

悲鳴をあげて味方を引き寄せる餌にされるなり、何もせず殺して貰えずに苦しんで逝く様をそのまま観賞される事だつてあり得る。

前後をペーシャとStGが警戒しているし、信頼していない訳ではない、が、怖いものは怖いのだ。

そんな考えは無駄に終わり、今回は特に何も起こる事は無く二人で渡りきる事が出来て、その後StGも無事に渡りきれた。

そんな事を繰り返ししながら進んでみれば、そこそこ順調に行程は進んでいる。ふと、空を見上げれば、太陽は順調上つてサンサンと光輝いていた。

「今丁度12時です。んー、当初の予定より寧ろ早いくらいですね」

壁を背にし、前方とビルの影を警戒しながら進むペーペーシヤがポツリと皆へ伝える。

「おー、てことは良い感じってことだね！」

「このまま何もなければ良いですね」

「……まあ、後一回くらいは戦闘起こりそうな予感はしますわ」

「ヒイ……これ以上不毛な戦いは嫌ですよ……」

その言葉にビクリと体を跳ね上げると不安にそうにキョロキョロしだすペーペーシヤ。

そんな様子を見て、StGが思わず溜め息をついた。

「ペーペーシヤ、貴女ビビりすぎよ」

「怖いものは怖いんですよ」

「潜入でもそうですけど、怖がりな方が生き残れますから……」

「まー、そうだよStG？」

それに今はこんなんだけど、戦闘時にはしっかりと動くのがペーペーシヤさんだし問題ないって」

スコープピオンの言葉にガン、とした表情を浮かべるペーペーシヤ。

「それもそうね……さて、お喋りもここまでにしましょうか。」

予定だと次の通りを右折後、そこから550m通りを直進。突き当たりの丁字路を左折ですが……

次の直進してる間の道は正面から撃たれた場合、ろくな遮蔽物が無いですわ」

皆で電脳内のマップを確認しながら考える。

確かに、この通りは嫌な感じだ。

脇は雑居ビルやコンビニで埋まっており、丁字路に当たるまで脇道は無い完全な一直線。

私達が来た方を考えないとしても、今歩く歩道上に正面からの攻撃を守れる遮蔽物は無いだろう。

脇の建造物の入り口や窪みに避けるか、路上の廃車の影か。

それに、だ。

「マップ見ると正面に八階建てのマンションが建ってるね、これ。うげ、おまけにこつち側が窓側じゃん」

「つまり、窓からスナイパーやらマシンガンにロケット兵器が置かれてたら逃げにくいし、一網打尽の可能性がある最悪の地形です」

SPP-1が補足的に説明してくれる。

「私もここは作成時、懸念してました。ですが、他ルートは建物の倒壊、地雷源等があった時間の制約で厳しそうでしたから……」

「気にしても仕方がありませんわ。どのルートでも一つ位は危険なポイントが出来てしまいうものでしょう?」

「最大限警戒しながら進むしか無いよねー、結局」

「あ。隠れられてたら厳しいとは思いますが、一先ず私がサーチします」

一番高い索敵機能を持つ S P P ー が手を上げる。

その言葉に皆がコクリ、と頷き行動開始。

先ずはダミーが覗き込み、安全を確認。

すると丁度良く、数十メートル先のビルに運転席部分を突っ込んで横転しているごみ集積車があった。

完全に歩道を塞ぐように横転している為、ビルからの射線を完全に隠せ、そして中身に機械が詰まっていて弾は抜けにくい。

正にぴったりの遮蔽物だ。

「……ついてますわ。先ずはあのごみ収集車の所まで進みます。ペーパーシャ、ダミーの先行をお願いしますわ」

「了解……では、行きますね」



ダミーが物陰から飛び出し、素早く壁に沿ってごみ収集車まで歩みを進める。

ダミーは銃声に晒される事無く、無事にたどり着いた。

すると、ダミーは手早くごみ収集車のチェックを始める。

「……IED無し。StG、進んで問題ありませんよ」

あの横倒しのごみ収集車が使える遮蔽物なのは敵も分かっているだろう。だからこそ、トラップが怖いのだ。

「じゃあ、行きますわ」

後は別方位をカバーし合いながら一人ずつまたは複数で素早く右折していく。

無事に撃たれる事無く、全員が影まで進む事が出来た。

「よし、取り敢えず来れたね」

「ですわね……」

只、怖いのはここからですわ。私がスナイパーなら、撃つタイミングは脇に逃げられず、そして戻ることの出来ない所まで来た瞬間ですもの」

「じゃあ、そろそろ正面のビルを索敵しますね。」

あ、センサー類に処理を全力で回します。正面以外には反応出来ないと思いますので援護お願い致します」

「了解！ 任せてよ！」

S P P — 1 が潰れた運転席側へと向かい、ビルと車の隙間からマンションへと視線を向けた。目の光彩の色が変わっており、センサー類を稼働させている事が分かる。

その間、私達は S P P — 1 の方を伺いつつも、回りへ銃口を向けて警戒は怠らない。

「一……二階までクリア……三階も……」

皆の電脳へ直接極近距離通信を使って、S P P — 1 の小さな声とデータが送られてくる。

「五階まで問題、無し」

四階、五階へと解析が進んでいく。今のところ問題はない。

送られてくる解析データが六階の右端から始まった、その瞬間だった。

「六階……え、ッ!？」

S P P — 1 突然驚きの声を上げ、そして慌てて体と頭を引っ込める。

そして私達は顔を見合わせた。

「え、と。その、皆さんへ同時進行でデータ送ってましたから分かっているとは思いませんけど……」

「そうね、でもこれは……」

戦闘時には、常にリーダーとして冷静沈着な S t G も珍しく困惑している様子だ。

私もペーパーシャもその反応に無理もないと思った。

確かに私達が睨んだ通り、正面の八階建てのマンション。

その六階の部分真ん中に反応があったのだ。……あったのだけど。

「これ…その、SPPさん。間違いないですか？……あつ、SPPさんの腕を疑ってる訳じゃないんです！」

「気にしないで下さいペーパーシャさん。私もバグなのかと思つて、先程から四回程再解析をかけましたから……」

「じゃあ、間違いないつて事だよね……」

で、皆どう思う？このデータが間違つてなかったら、六階に生きてる《人間》が居るんだけど」

人間、その言葉に皆が改めて顔を見合わせた。

SPPーが送つてきてた解析データには、間違いなく六階部分の窓から立つて此方を見ている人間の影が写っていたのだ。

サーモや画像解析その他諸々の結果からも機械ではなく、人間の男性の可能性大と出ている。

「この辺りつて少し前までそこそこドンパチしてた地域だよな？」

「ですわねえ」

「ここつて一応緩衝地域だけどまだグリフィン支配地域より、鉄血サイドに近いよね？」

「はい、そうです」

「……んで、近いグリフィンの支配地域に民間人の居住エリアは無かった上、そもそもここ半径10km位は立ち入り禁止だよね？」

「で、ですね！」

「じゃあ、何でこんなところのビルに人間が居るの？」

「「さあ？」「ですわ」

予想外だよ、正に。

任務の内容もあって、細かく指揮官からの指令が受け取れない以上、事前指令や暗号化された司令データを順次状況に応じて解凍する事で進んできた私達だけど、こんな事態に落ちいるとは考えてすら居なかった。

「ど、どうしましょう？！保護いたしますか？」

ペーパーシャが保護、その案を上げた。

実際に任務の際、正常であり反社会的では無い民間人を見つけた場合、最大限配慮をもって人命保護に当たるのが基本だ。

……しかし。

「今回の任務指令及び指示された交戦規定<sup>RE</sup>には保護に関する記載が無いわね」

「こつちも改めて確認したけどやっぱり無いねえ」

それが今回の任務に関しては、対処指示が存在して居なかった。

私達はずっと任務内容やら交戦<sup>R</sup>規定<sup>E</sup>に従っていれば、ルーチン内で処理出来たことであり……自ら考えた事等一度たりとも無かったのだ。

「そちらの指揮官に通信繋いで聞いてみると言うのは？」

「んー駄目ね。規定で決まった時間とその他状況でないと繋げてはダメになってるの。後、ここでそんなデータ量の多い通信したら近くにいる敵にバレるわ」

「……そもそもこんな所に態々来たりするのってスカベンジャーもしくは反社会的武装集団……つまりは違法な連中が大半だよね」

「で、ですねえ」

「……取り敢えず、撃つっちゃおう？」

「だ、駄目ですよ!？」

それはグリフィンが規定する人形への交戦<sup>R</sup>規定<sup>E</sup>に反します! 今回の任務で出された交戦<sup>R</sup>規定<sup>E</sup>がグリフィンの規定に対しての優先命令が出ていない以上……人間への攻撃は手順に従わないと出来ませんっ」

「スコープオン、流星にそれは駄目ですわ……」

「ご、ごめん! 軽い気持ちで言った冗談! 冗談だから!」

そこそこガチめに怒るペーパーシャとジト目のStG。そして、苦笑いのSPPI

に囲まれ、慌てて私は頭を下げた。

「まあ、それも一つの考えではありませんが……」

何れにせよ、相手から敵対行為が確認出来ない限り規定にしたがって、外見及び武装確認、警告、警告射撃の三つの手順を踏まないと危害射撃は出来ませんわ」

「二応、私のデータを元に外見、武装確認手順は踏めるので一段階目は問題無いかと。画像をみる限り、明らかに武装した男性だとは思われますが……」

「手に持つてるのはアサルトライフル……データ照合の結果を見限り、FAL系統の銃なのは間違いないね」

「7.62mm…フルサイズ弾ですか。……完全に此方は射程負けしてますね。私やスコーピオンさん、SPPちゃんでは撃ち合いになっても射程外です」

SPP-1は拳銃であり、水中銃だ。

ダーツ状の特殊な弾を撃ち出す特殊な銃であり、地上での有効射程は精々長くて15m〜20m程度。

私とペーパーシャ、その認識名と同じ名を持つ、もう一人の自分と言っても過言ではない小さな相棒は相手の持つフルサイズ弾を撃てるライフルと違って、拳銃弾を利用するサブマシンガンだ。

ペーパーシャこと、PPSh-41が使用する弾薬は7.62×25mm トカレフ

弾。同じ口径の弾でも、弾を飛ばす為の火薬量、そして弾頭重量すら二倍以上小さく違う。その有効射程は150m〜200m前後だろう。

私のVz61が使用する弾薬はそれよりも更に小さい。32ACP弾。有効射程はそれに比例して短く、80m〜100mあれば良い方だ。

つまり、謎の人間から撃たれたとしても、私達三人は反撃できないと言う訳。

無論、これらの有効射程は状況に応じて変わるしあくまでも目安的な存在ではある。とは言え、私達には約500mと言う距離は長すぎる。

まあ、弾は飛ばそうと思えばマンションまでたどり着きはするだろう。本当に飛ぶだけでマトモに当たりはしないし、被害も与えられはしないだろうけど。

「私のStG44もこの距離は厳しいですわ。

……相手はFALですし、ポジション的にも不利ですもの」

StGの使う、StG44は所謂アサルトライフルの始祖と呼べるべき存在の銃だ。

弾薬は7.92x33mmクルツ弾を使用。有効射程も長く、300mは余裕で越えるだろう。セミ／フル切り替え可能の実に優秀な銃である。

だが、使用弾薬は中間弾薬と言われる存在であり、フルサイズ弾には到底パワーでも有効射程でも及ばない。

相手の持つFALは何度も出てきた、7.62mm×51弾を利用し、世界中で使わ

れた歴史を持つ傑作銃だ。

フルサイズ弾を使用する関係で、フルオート射撃時には過大な反動によって射撃精度が見込めない、極地環境に弱い構造と幾つかの弱点はあれど、非常に優秀なのは間違いない。

セミオートでの単発射撃ならば素晴らしい射撃精度を持っているし、そもそも前世紀時に問題となった過大な反動も、今現在2050年代となつては最新の衝撃吸収材を利用したアタツチメントやら射撃支援システムやら新たな対応策が生まれている事。

そもそも撃つ存在が只の人間では無い事によつて大きな問題では無くなっている。

つまりこの距離で撃ち合いになれば、相手が人間とは言えどStGが不利なのは間違いないね。

まあ、なんだ。元から覚悟の上だったけど、人間とは予想外で変な空気になつてるねえ。

「さーてどうしよつか?てか、良く見るとこれアンダーバレルにグレネード付いてない?」

「着いてますわねえ。恐らく、GP-25……いや30かしら?」

「それどつちでも対して変わらないんじゃないですか?」

「ひい!」



何でそんなに三人共冷静で居られるんですかあ！下手しなくてもこれ40mmで吹き飛ばされるんですよお！」

「まあ、慌ててもしょうがないじゃん？んで、こんな過剰装備してるんだし、規定を……無理か。拒否されたよ」

攻撃への処理を行おうとしたが、規定文の乗った警告と共に、処理の強制シャットダウンが行われた。

「そんなので突破できたら問題になりますわ」

「ダメ元ダメ元。あー、爆薬も無いから建物の壁を粉碎して進むのも出来ないし、出来るだけ壁に隠れつつ沿って進むかそれとも戻るか。その二択だね」

さて、どうするリーダー？

そう、StGへ問い掛けたその瞬間だったと思う。

プツリ、その音をたてて、私達全員へと基本人形のみが使う、筈の通信へ接続された音が響き――

『あー、テスト。……よし。えー、収集車の影に隠れてるグリフィンの皆さん。キチンと俺の声が聞こえてますかね？』

暢気そうな男の声が私達へ響き渡った。

## 4 頁目

絶句。いや電腦がフリーズした。

今の私達を表すならばそんな表現が正しいのだろう。

こんなにも軽い雰囲気では通信に割り込まれたのだから当たり前だ。

IOPと強く繋がり、数多く存在するPMCの中でも最大規模で戦術人形を運用するグリフィンはそれに応じた対応の技術と言うモノを持っている。

つまりは、人形通信に関する暗号化技術も相当な物になっている訳であり——こんな容易に通信へと割り込める筈が無いのだから。

『おーい、聞こえています？』

……あれ、おかしいな。送信用の周波数と暗号変数違ってたか……？』

絶句しながら顔を見合わせ続ける私達を置いて、一人で喋り続ける男。

『いや、合ってるな……あ。これは申し訳ない。そりゃ突然通信に割り込まれて、知らん奴にベラベラ話されたらドン引きですよね』

やっとフリーズから回復したStGが動揺しつつも返事をし始めた。

「あ、貴方は一体……いえ、そもそもどうやって私達の回線へ割り込みをしているのですか

!？」

『うおっ?!驚くから突然大声出さなくてくれ……うん、無事お返事が頂けて嬉しいね。俺はご存じの通り正面にあるマンションの六階、607号室に居る者だよ』

「何、ふざけてんの?」

『至つて真面目ですとも。……で、次はえーと、どうやって割り込んだ、だっけ?』

それはこの回線と通信する為に必要な機材が俺のあり、そして必要な情報も俺が知つてたからかな』

「そんな…軍かIOP、内部<sup>G&K</sup>の者でも無ければ規格にあつた通信機器用意できる訳が……そもそもどうやって組まれた暗号を突破して……?」

潜入任務に良くあたっているからだろうか、その辺りに恐らく私達より詳しいからだろう。SPPIIが動揺している様子が見えた。

「そ、それで貴方は何者なんですか?軍なんですか?そ、それとも人類人権団体の人形狩りなんじゃ……?!」

『俺はそんな大層な存在じゃないし、君達を襲つたり、アホな大義掲げるテロ屋の屑共でもない。只の野良……ホームレス傭兵だよ』

「傭兵、ですか。今の所、貴方は私達にとつて立入禁止エリアに居る武装した不審者の上、暗号化された秘匿通信へ割り込んできてる電子犯罪者ですわ」

『手厳しいな』

「手厳しいも何も事実じゃん。で、態々割り込んできたんだから目的があるんでしょ？あ、降伏勧告とか武装解除とかなら応じる気はサラサラ無いとだけ先に言っておくからね」

『そんな考えは無いから安心してくれ。むしろ、君達を助けたくて俺は今の今まで動いてたんだ。この通信だつてその一貫だ』

助けつて、その言葉に仲間達が一瞬揺らぐ。

「助け、とはなんです？」

『そのままの意味だよ。君達の詳しい目的は一切知らないし、知ろうとも思わない。けど、君達が鉄血支配地域から来て、グリフィンの方に向かってるって事は見れば分かるからね。』

つまり、その助けをしたいのさ』

「……はつきり申し上げますけど、私達だけでもたどり着けます。それは余計なお節介と言うやつですわ」

『本当はそれが一番良いんだけどね？』

恐らく君達は知らない情報だと思うが、この先に鉄血の連中が一個小隊規模で待ち伏せしてる』

「…………それ本当？訂正するなら今の内だからね？」

その話が本当ならかなり不味い話だ。

一個小隊なら最大で50体前後の敵が居ることになる。……今の私達が出会ってしまえば到底勝てる規模とは思えない。

『本当だよ、本当。ここで嘘をつく必要が無い。確認した限り装甲野郎が一個分隊丸々いるし、火力支援のマシンガンも揃ってる。……正直、俺が見た限り君達の装備だと厳しいと思うが』

絶望的な情報がどんどん追加されていく中、StGが皆へ今の会話している回線とは別の超近距離通信で送ってきた。

（話している間に相手の情報を探ってくださいな、SPP。権限名位は分かる筈ですわ）

（あ…………り、了解です）

（でも、StGさんどうします…………？通信越しですし何とも言えませんが……）

私の対人対話プログラムは、敵の情報に関しての発言は92%の高い確率で嘘ではないと判断しています）

（ペーパーシャさんも？私のも89%だつて）

（私も同様ですの…………今、軽く真意を聞いてみますわ）

「で、それが本当だとして…………そんな状況におかれてる私達を貴方が助けるメリットが

分かりませんの。

戦場で倒れたとしても、私達人形はマインドマップさえバックアップしておけば何度でも復帰出来ますが……貴方は人間でしょう？」

まだ、人間の脳化技術もそこまで進んでるわけでもない。一応、軍も採用する程度には認められてはいるけど、義体化も同じような物だ。一部の人工心臓、やら義足、義手、義眼程度で……完全な全身機械の体となる、所詮【全身義体】はまだまだ未来の話だ。

つまり人間はまだ、生き返る事は出来無い。ただ、人形のような方法で生き返ったとして。果たしてその人間は死ぬ前と同じ存在なのか？

そんな疑問は残るけど。

『確かにその通りだ。人間は君達と違って死んだら終わりだよねえ』

「な、なのにな何故助けようと……？」

ペーペーシャの問い掛けに、相手の男は数秒押し黙った。

そして、溜め息が聞こえーさっきまでの陽気で軽い声と違い、若干気恥ずかしそうな声色が変わって理由を話す。

『……もし、来たのが君達じゃなくて軍のリコンとかなら俺はとつく前に見捨てて逃げだしてる。』

昔、グリフィンと一緒に良く仕事してた時期があつてね……

そこで出会つた人形達綺麗で素敵な娘達ばかりだつたつてのもあるし、命を助けてもらつた事もそこそこあつて……な？ちよつと恥ずかしい話、その時の恩返しをしたいつて訳』

「恩返し、ねえ……」

『無論それだけじゃないさ。現金な話になるけど、グリフィンさん滅茶苦茶報酬の支払い良いのよ。だから、ここで君達助けて臨時報酬得て媚び売つて今後の仕事の種をGETしようかなーと』

長々とごめんね、そう最後に閉めて彼は喋るのを止めた。

「つまり、私達を届ける事で個人的な恩返しのでにグリフィンから感謝料と今後のコネを作つて仕事を貰おうとしてるって訳ね？」

『簡潔に纏めてくれてどうも。傭兵の俺にとつて、君達を助ける事では入るものが命のチップを賭けるに値するからこうやつて動いている。釣り合つてなかつたらとつくの昔に逃げてるからね』

「なるほど。……で、そんな心優しい貴方に助けてもらうにはどうしたら良いんですの？」

『心にも無い事言いますね……』

あー、先ずは何もなかった振りして貰って、そのまま俺の所まで来て欲しい。敢えて言ってなかったけど、恐らくずっと君達を鉄血のスカウトが監視してる』

「……それ、マジ？」

『本当。今俺の目の前にも、さっき倒した奴が二体転がってるよ。』

奴ら無線通信でバレないように無線封鎖して、レーザー通信や発光信号でのローテク手法で小隊長へ報告してる。まだ別動隊が居ると思うし、バレたら間違いなく一個小隊分の敵が押し寄せて来るので早急に合流したい』

「……少し、仲間と相談させてくださいな」

『……別に構わん。ああ、別に君達が断ったとしても、俺は手出しはしないとだけ先に言っとくぞ。』

さて、あまり時間も無いからな。二分以内に今から送るチャンネルへ返答を。二分を越えた時点で、俺は君達を置いて離脱する』

懸命な判断を期待する、その言葉とチャンネル番号を残してプツリと通信が切れた。

「それでSPP、相手について何か分かったー？」

私は必死に回線解析を行っていたSPPーへと声をかける。でも、浮かべる表情を見る限り……そこまで情報は取れなかったようだ。

「グリフィン技術部の上級補給管理官認証で割り込んできます。それ以上はダミー



データが多くて……」

「グリフィンの役職権限をどうやって……」

「ねえ、ペーパーシャさん。そのレベルの権限で私達の通信に接続なんて出来たっけ？」  
「お、恐らく、緊急時の物資情報に関する権限を利用したのでは無いでしょうか……？」

上級補給管理官……特に技術部なら秘匿性の高い物資が運搬中に何かあった際、対処の為に付近の人形に対して緊急通信が出来る筈です」

そこで会話が途切れる。4人共にこの通信相手に対して判断しかね、お互いの顔を行ったり来たりして見つめ合う。

何れにせよ、タイムリミットは二分でそれまでには答えを出さなければいけない。

「それで、えっと。皆さんどうするんですか？……私は護衛される側ですし、三人の決定に従いますよ」

沈黙に耐えかねたSPPー1がそう、切り出した。

思わずペーパーシャを見れば、相手もこちらを見つめていた。意図しない形でお互いに見つめ合う形となり、何故か少し可笑しくなる。

「あーあ、悩むのやーめた！

みんな、私はこの相手を信じるよ。……只の直感だけだね」

「私も信じてみようかなと、思います。しよ、正直まだ少し怖いですけど……」

「……二人共にそちら側ですか」

「正直、本当に信用できるかって言われたら疑問だけどね？」

でも、ぶっちゃけ襲うんならこんな手間踏む必要ないもん。後、本当にその規模の敵がいるなら今の私達じゃ高確率で文字通り全滅するからね」

チラリと皆を見回しながら、そう答える。

……まあ、一定は話の流れとして筋は通ってるし、フリーの傭兵が金払いが良いグリーンとの繋がりをもちたいのも理解出来る事だしね。

「一個小隊と殴り合いは考えたくありませんわね」

「私は戦力外ですから、ダメー含めて五人では厳しいですよね……」

それに私達だけで進むにしても、その情報がある以上このまま地上を進む訳に行けませんし」

「SPPちゃんの言う通りです。このまま進むのなら早めに予備ルートの地下……下水道の入り口へ向かわないと行けません」

ピクリ、StGの肩が揺れる。

「だよなー？嘘かもしれないけどさ、一応考えておかないとね。因みに一番近い入り口の所ってどこなの？」

「えっと……繋がっている所はここですね。一旦こう、戻って……ここを左折した先に

あるマンホールから入れます」

SPPが共有マップを開きながら、線を引き。ここを戻って1ブロック隣の交差点らしい。…まあ、そんなに遠くはない。

「ねえ、StG。結局、どーする？」

このまま戻ってもいいし、信じてみるのも良いよ。どっちを選んでもリーダーの決定を私達は信じるよ！」

そう話しかけてみるも、何故かStGがらの反応が無い。

StGの顔を見つめてみれば、心あらずといった様子でぼーっと何故か何処かを見つめながら、時折心底嫌そうに顔を歪めてまた最初に切り替わるの繰り返し。そんな様子を私が見つめている事に気づき…ハツとしたStGが、コホンとわざとらしい咳払いをして取り繕う。

ゆっくりと見ていた目線の先を追ってみれば、そこには地下へつながるマンホールが存在していた。

「……………この通信相手へ連絡を入れましょう。」

私も悩んでおりましたが、スコープオンとペーペーシャが信じるのなら大丈夫でしょう」

「……………ねえ、StG?何か急に綺麗なこと言ってるけど下水道入りたくないだけじゃ…」

「そんな事無いのです。そんな事ある筈無いのです。私もそう思っておりますの。」

さて、皆さんの意見も一致しましたし、時間もありませんからもう返事しちゃいますわ！」

そう言つてSttGが無理矢理私との会話を終わらせ、データを元に暗号化処理に緊急時の攻勢防壁の用意を進め通信を繋げ始める。

何と言うか。前からそうだけど、SttGは本当に潔癖と言つても過言では無いくらいに綺麗好きだ。

無理矢理に話を切られて：思わず二人に変な表情を浮かべて視線を向けてみれば、「アハハ」と苦笑いなのか慈愛の笑顔なのか良く分からない表情を二人共浮かべている。

……うん、もう何も言うまい。リーダーが決定したなら従うまで。

SttGが一对一の通信ではなく、皆に聞こえる様にして相手呼び出す。

数秒の雑音の後、プツと通信が繋がった。

『お返事頂けたようで何よりだ。それで、そちらの返答は如何に?』

先程の男からそう問いかけがなされる。

「貴方にここからの離脱まで援護を依頼しますわ」

『おお、良かった良かった。いや、断られたら半日の努力が無駄になる所だったから本当に良かった』

StGの返事に良かった、そう繰り返しながら嬉しそうな声色で返事が帰ってきた。  
…この様子なら本当に大丈夫そうかな？

「……で、私達四人はどうしたら良いんですの？」

StGのその問いかけに少し考えている様で、返答までに数秒の間が開く。

『先程も伝えたが、一旦ここまで来てくれ。後、この通りには敵が居ない事は確認してある。…が、敵に悟られるも嫌なので、そこそこ素早く警戒しながら来てほしい』

「分かりましたわ」

『一応、何かあった際にはこちらから情報と支援をするから任せてくれ。今後の会話もこの回線で行うから宜しく』

「では、そちらに向かいますわ。建物に入る時点で連絡を入れますから、誤射だけはしないで下さいな」

『絶対にしないから安心してほしい。それと、建物内や入り口にもトラップ類は仕掛けてないからそのまま上がってきてくれ』

じゃあ、お待ちしますよ。その言葉を残して再びプツリと通信が切れた。

「と、そんな感じらしいですわ。皆さん、さっきの回線番号を四番に登録しておいて下さい」

「了解です」

回線の情報を記録し、四番へと振り分ける。

因みに一番が指揮官とのやり取り用で、二番が私達の部隊内限定用。後、三番が広域通信用で他部隊とのやり取りに使う為の物になっている。

「で、どうしましょう?」

「まあ、パパッと軽く素敵しながらドンドン進んじやえば良いんじゃない? 彼も敵は居ないって言ってたし」

片手の銃を通信相手のいるマンションに向かって指しながら答えた。

「スコープオン、あまり銃口をフラフラさせるんじやありませんの……」

まあ、その通りですわ。アパートまで素早く進みましょう。SPP、申し訳ありませんが周囲の警戒をお願いしますわ」

「StGさん、任せてください!」

「隊列はさっきのままで良いよね? それじゃあ、いこつか!」

改めて、隊列でのポジションを再確認して進みだす。勢い良く障害物から飛び出して、右側の端に沿って手早く進んでいく。

「……出たときに撃たれなくて良かったですわ」

チラリとマンションへ目線を向けてStGがそう独り言ちた。

「あ、やっぱり気にしてたんだ?」

「それはそうでしょうに。完全に信用したわけでは無いんですもの。出た瞬間、40m mでドカンとかも想定してましたわ」

「そんなの洒落にならないですよお！」

先頭を進んでいたペーパーシャが私達の会話を聞いて、思わず振り向きながら小さな叫び声を上げた。

「まあまあ。結局そうはならなかったんだし、大丈夫だって……で、今も同じ所に居るの？」

SPP-1の方を向いてそう問いかける。

「え、つと……はい、居ますね。ただ、さつきみたいに棒立ちじゃなくて伏せた状態で索敵してるみたいです。それと、上から断熱素材のカモフラージュを被ってるみたいです。」

……一瞬、部屋から居なくなったのかと思いましたがよ

って事はさつきの発言通り、私達の為に働いてくれてるって訳ね。

「わざと見つかる為にあんな棒立ちで居たのかな？」

「まあ、そうでしょう。……そのビル、ガラス張りですから中に注意。ペーパーシャ、確認お願いしますわ」

話ながらも警戒は怠らない。1階部分全てがガラス張りになっている商店ビルへ視

線を向けながらStGが指揮を飛ばす。

先頭を進んでいたパーペーシヤがダミーを走らせ、サツと簡単に索敵をこなした。

結果はクリア。私達へダミーが「前進」のハンドサインを向けたのを確認してから、一列でビルの前を渡った。

とは言え、今までよりは明らかに素早い速度で進んでいく。見るべき側道も無いし、ビルも警戒はしているけどサツとで済ませる。今は時間と速度の勝負だと言う事にStGも理解しているからだろう。

そうして進んでいけば、15分前後でマンシヨンの前まで来る事が出来た。

「たった今、マンシヨン前の交差点まで来ましたわ」

StGが事前告知の通り、通信を繋ぐ。

『…確認した。上から見る限り、右左共に敵の姿は確認できていない』

上から見てくれていた様だ。マンシヨンの向いている窓は出窓の様だし、それで確認できたのだろう。

「感謝します。……1階部分、エントランスのガラスが割れている部分から建物に入りますわ」

StGが片手を其方に向けて、モーシヨンで皆へ場所を伝える。

そこを見てみれば、枯れてスカスカになった植え込みの先で大きなガラスが割れてい



た。中には元は立派であつただろうエントランスが見えている。

『あー、了解した。では、六階に着いたらまた頼む』

「了解ですわ…通信終了」

「問題なしだね」

「ここまでは、だが。」

取り合えず周囲の警戒は怠らず、右左の側道を確認しながらお互いにカバーしあつて対岸へと渡る。

枯れて枝だけになった植え込みと錆びた金網が視界に入る。そのまま沿つて歩けば、金網で出来た裏口らしき扉を発見できた。錆び錆びになっており、鍵は掛かつていない。

StGが扉を押し開けて、マンシヨンの敷地内へと入っていく。

上を見上げれば、六階部分からは屋根や建物自体が邪魔になつて丁度死角になつてい

る。「で、いかが致しますかStGさん？流石に何も対策無しはまずいですよね？」

上から死角になっているのを確認してから、ペーパーシャが語りかけた。

「ですわ。一応、各員ある者は手榴弾を用意しておいてくださいな。……フラッシュバンスタン余つて

いる方いらっしゃいます？」

「了解了解、私はスタンは無いなー」

リグを弄って、しまっておいた手榴弾二個を投げやすい位置に変えておく。

「あ、私スタン一個だけ残ってます。……私が持っていては仕方ないですからStGさん御願いいしても良いですか？」

S P P ー1がバックバックを漁って、スタングレネードを取り出してStGへと受け渡す。

「助かりますわ。さて……結局はコチラへ対する射撃体勢を確認するまで攻撃は出来ませんから、それだけは皆さん気をつけてくださいまし」

「はいはい、まあそしたら先陣をタミーにさせて何とかするしかないっしょー」

お互いに如何するべきかを簡単に話し合う。……まあ、結局相手が警告を無視するか撃たれそうになるまで発砲出来ないのが足を引っ張る。

「じゃあ、行きますわよ」

そのStGの言葉に引き連れられて私達はマンシヨンの中へと歩みだす。

まあ、物事はなるようにしかならないし全力を尽くして、頑張るしか無いよね！

## 5頁目

パタパタパタ——実際はそんな生易しい音では無いが、規則正しいテールロータの激しい羽音が響き続ける。丁度頭上にあるエンジンの轟音とその羽音に支配された狭苦しい兵員室の中に私達は居た。

チラリと窓の外を覗けば、私達の搭乗する輸送ヘリの護衛である<sup>スーパード</sup>Mi-24 Mk4が右側に少しずれた横並びで飛んでいる。あの中には迎えに来た<sup>戦術人形</sup>仲間達が乗っていて、<sup>輸送ヘリ</sup>こちらには共に敵地から脱出してきた戦友しか……いや、正確にはグリフィン所属パイロットの二種類の存在しか乗っては居ない。

つまり、ここにあの男の姿は存在していなかった。

「どこかに消えちゃったんだろな」

思わず、ポツリと私の口から言葉が飛び出した。

結果から言えば、あそこから誰も……ダミーすらも欠ける事無く無事に回収地点まで辿り着く事が出来た。そして、私達は迎えのヘリの中で皆が今こうして機内無線の付いた<sup>イヤーマフ</sup>ヘッドセットを付けて、座り心地の良くないチンケな座席に座って居る。

ふと、何かを感じ視線をStGへ向けてみれば……相手もコチラを見つめていた。

「彼の事を考えてましたの?」

耳元の厚い防音素材に守られたヘッドセットにStGの問いかけが伝わり、私の耳を叩く。

この声は皆に聞こえている筈だけど、ペーパーシャにSPPIー1は今は小休憩中だ。言ってしまうえば睡眠中、と言った所。

だから、この質問は私にだけ問い掛けられた物と言う事になる。

「まーね……てかさ、良く私の考えている事が分かったね」

クスリ、StGが少し微笑を浮かべて手で口元を押さえた。……一体、今の何が面白かったと言うのか。

「あら、ごめんなさいねスコープオン?……眩きが漏れてましたわ」

丸聞こえでしたの。そう言って、口元へ伸びたヘッドセットのマイクをトントンと指先で叩き——同時にコンコン、音が私の耳の中へ響き渡った。

さっきの眩きが聞こえていたのか、その事に今気が付いた。ボソツとした小さな音量だったし、拾えていないと思っていたのに。

……金があるからってグリフィンは無駄にこう言った小物まで良い物を使いすぎだと思う。

「ちえっ、そうやってからかうの止めてよね」

足を組んで、以下にも私不貞腐れますアピールを行うが…あまり通じはしなかった様だ。

「これくらい良いじゃありませんの。円滑なコミュニケーションって奴ですわ。」

……それでやっぱり貴女も気になってますの？」

「まあ、ね。」

…助けてくれたかと思いきや、何時の間にか居なくなってるし。てつきり一緒に離脱するか、せめて見送るなり何なりしてから別れると思ってたからね」

「私も、ですわ。集合地点に着いて気が付いたら居なくなってるんですもの。」

……せめて最後にお礼位は言いたかったですわね」

脇に立てかけたもう一人の自分を撫でながらStGが言葉を閉める。それは私も同意出来る事だった。

私も、と言うか……

私達は結局、案内してくれた事に関してお礼言えず仕舞いだったのだから。

彼の案内で回収地点に着いたのは良いが、決められた合流時間までには幾分かの猶予が存在していた。

だから警戒の為に交代しながら待とうって決まったのは良いんだけど…ね？

ふと、気が付けば…メモリーカード共に添えられた『名刺データが入ってるから渡し

てくれ』と一言書いたメモを残し、私達に一切悟られる事無くその場から消えていた：そんな彼に対して。

彼とのファーストコンタクトはぶつちやけて言えば、滅茶苦茶怪しい自称傭兵の犯罪者つて認識が正しかっただろう。

実際怪しき満点だし、やってる事が進入禁止エリアに入り込んでる上に治安維持、統治機構として働いてる準軍事組織たるグリフィン私達の通信傍受した上に乱入だからね？間違いない、グリフィンの支配地域で施行してる法や依託を受けている国の法にに照らし合わせても100%アウトの行為しかしてない。

まあ、それでも彼に助けをもらおうと言うか、現地協力者として依頼する形で切り抜ける事にしたのが私達だ。

事前に通信越しに打ち合わせした通り、彼の待つマンション六階の一室へ入ってみれば——そこに居たのは倒したスカウトと見られる鉄血兵Jäger二体を高周波ナイフでサクサク切つて解体しながら背中越しに私達へ話しかける男の姿があったんだもん。

いや、軽く引いたよねマジで。特にペーパーシヤなんか悲鳴軽く上げてたし。

……でもそんな初見の印象と違い、直接話してみれば良い人だったね。通信越しだとちよつとふざけてるのかな、なんて思ってたけど……

実際は真面目な時は真面目だし、場面場面でのON/OFFの切り替えが上手い、と言えれば良いのかな？

そんな彼を見る限り、歳は20—30代位。バイザーにフェイスガード越しで見えにくかったが、ここいらでは珍しいアジア系顔つきで—体の出来や装備からして正に自己申告どおり傭兵つて風貌をしていた。

只、その装備はそこらへんのごろつきが持てる物じゃなかったし、キチンと手入れがされていて使い慣れている。そしてそれだけじゃなく……良く居る民兵崩れの傭兵なんかでは無く、彼の体の運び方や諸々の動作一つを見てもプロの訓練を受け、其れに見合う技術を持った人間だとは嫌でも分かった。

……なんでそんな人間がこんな所に居るのか疑問は尽きなかったけど聞かない、無駄な検索はしないのがマナーって物だ。

で、そんな彼から提示された敵の画像や動画で情報を見て……信じたのは正しかった、と隊の仲間には皆その時にそう思ったはずだ。

実際、伝えられていた情報とほぼ代わらない敵の様子がそこには映し出されていたし、おまけにあの時アパートで決めてその後通る予定だったルート……正にそれドンピシャの位置に待ち伏せが仕掛けられていたのだから。

無論、こつそりSPP—1に分析してもらって、それらがガセネタでは無いと証明し

てくれたのもあるけどね？

それでその状況に焦ると言うか、改めてルートをどうするのかで揉める私達に――  
「私に良い考えがある」

そんな事を言つて彼が提示してきたのは、私達が知らない町に走る謎の地下道のマップ  
ブータと来たもんだ。てつきり最初は、そのデータは私達も想定していた下水道やガ  
スと言つたインフラ系の通路で考えが被つたかと思いきや……見てみれば、グリフィン製こちらの  
マップには載つてすら居ない。事前に聞いた情報とは一切重ならない謎の通路。

詳しく話を聞いてみれば。

少し昔……戦前から戦後の混乱を極めていた時代にこの地域を支配していた武装勢  
力やらが掘つたりした物や別の麻薬密売組織何かが掘つた地下道が諸々つたマップ  
データ、らしい。

……何でグリフィンすら知らないデータを彼が知っているのか。そんな疑問をぶつ  
けてみても、友情やら企業秘密と言つてのらりくらりと誤魔化される始末。何れにせ  
よ、少し離れた民家まで行つてその地下室の壁をふつ飛ばせば地下道へ入れるのだと  
分かつたし、それらの出口の一つが私達の目指す回収地点の極付近まである事が分かっ  
て、一つの希望が見えたのは間違いない。

その後はなんだか……言つてしまえば、今までで一番楽な道程と言える展開になつて



しまった。

だって一番緊張したのが、最後の最後である回収地点である立体駐車場に向かう時と迎えを待つてる間だけだったのだから。

別のスカウトに見つかる前に急いでマンションを出て、数百メートル先にある民家へかう時も緊張したにはしたけどね。

最後まででもなかった、と言うのが感想だ。

最初は彼が初対面の私達とキッチリ連携が取れるのか：何て不安もあつたりしたけどね？

蓋を開けてみれば、キチンと私達に息を合わせた動きをしてくれるし、その動作もプロその物であり、直ぐにその点に関して一切心配する必要はないと気がついたからね。

その後は……間違いなく一番気楽だったかな？

何事もなかったどりに着いた民家の地下室の壁を爆破するのにも、彼が用意してあつた薬で綺麗に穴を開けてくれたお陰で、問題なくその脇を通る……まるで坑道のような地下道へと入る事が出来たわけで。

あ、一つ訂正。全く問題が無かつた訳じゃ無かつた。

さつき地下道を坑道のような、と言つたけど……よーするにその地下道は壁全面をコンクリートで補強などそんな上等な道などではない。只の固めた土壁に潰れないよう

組んだ木や鉄骨で天井と壁を支えてる、正に古き時代の坑道そのものであり……つまりは壁から漏れてきた水で湿気が凄く、むわつとしたカビの匂いが混ざり混んだ土の臭いが充満した空間だった。

そしてそれを感じ、見たSttGの顔は真っ白に死んでいたのである。

最初は下水道よりはマシと言っていたSttGだったが……只の武装勢力や密売組織にグリフィンの前線基地にあるしつかりとした地下道を構築するなど不可能なのを忘れていた様だ。

もうここまで来ているのに、ジタバタと嫌ですのー！とか騒ぐSttGを皆で説得して引きずり込んだり、地下道内に居るせいで外と通信が出来ない為に、指揮官への定時連絡や回収部隊への連絡が遅れてしまう事と言った約二点の問題は発生した。

結局、問題らしい問題はその程度で、ゴール地点まで敵と一度も遭遇することなく、暇潰しに酸素マスク越しの彼と皆で軽く話ながら地下道ピクニックを約一名を除いて、楽しんで位なのだから。

ま、楽しんだと行ってもひたすら二時間前後かけて真っ暗な地下道を歩き続けただけなんだけどね。

だとしても、確実に敵からの弾が飛んでこないと言うだけで十分に気楽で楽しい時間に変わるのは違くない。

道中見つけた、空調が生きている休憩用と見られるちよつとした小部屋で休憩ついでに昼御飯を食べる事が出来たのは大きかったし、とても良い時間になった。

何故なら、彼が好意で持っていた缶詰とか民間の保存食を人数分けてくれたつて言うのがある。

……正直に言つて、私達に支給されるレーションは種類はあれど全て味に関しては美味しくないか、ひたすらに不味いか、特に感想なし普通の三種類しか存在しないからありがたい話だ。

特に私達の中で一番長い期間をそんなレーションしか食べられてなかったSPP—Iはとても嬉しかった様で、予備のヒートパックを使って加熱が終わった瞬間、目にも止まらぬ早さで蓋をサツと開けてメニューの炒飯や魚の煮物をガツガツかつ込むように満面の笑顔で食べてたね。

まあ、本当にこの程度しかなかったんだよね。

後は最初の通り。

事前に決めていた出口から飛び出し、30分前後進めば、目標である回収地点の立体駐車場まで敵と会うこと無くたどり着くことが出来た。

その後、私達は三方に別れ立体駐車場を確保しながら待つただのだけど……その時にいつの間にか彼が置き土産を残して居なくなっていたんだよね。

まあ、慌てて探したりもしたけど結局、見つからる訳もなく……

数十分後に迎える部隊が来たからその場で合流して、へりが無線で呼び、降りてきたへり搭乗し——今に至るといふ訳なのさ。

まっ、私としては終わりよければ全てよし。

道中、ダミーは失ったりはしたけど……

彼が待ち伏せを教えてくれたお陰で、誰一人として死ぬ事なく無事に帰ってこれたのだし！

今回は敵地でのSPP—1との合流から回収までで計2日かかるそこそこ長い任務だったから、何事にも全力な私も疲れちゃった。

基地についたら、先ずは風呂に入る事と体から銃も全て隅々まで整備メンテしてもらって、汚れてしまった全身を綺麗にしたいし、何よりも糞不味いレーションなんかじゃなくて、暖かくて美味しいご飯を食べたいのだ。

結局、なぜ彼は何も言わずに消えて決まったのかは分からないけれど……基地に帰ってからゆっくり考えれば良い。

本部の人達に今回の顛末とこのメモリーカードを渡せば、彼も希望通りグリフィンとお仕事出来るだろうしね。

そして……そうすれば何時かは何処かで私達も会える時が来るだろう。

だからその時に今回のお礼と勝手に居なくなった事情を問い詰めようと思う。

それに彼自身についてコールサイン以外殆ど語ってはくれなかった。それも合わせて尋問するでしょう。

それで万事解決だよね！

さつて……今日の出来事を長々と思い出していたけれど、私もペーペーシヤやSPP—1の二人みたいにそろそろ休眠モードに入らせて貰おうかな。

StGは最後まで起きているそうだから何かあつたら起こしてもらえるっぽいし、基地に着くまでの間休むでしょう。

この任務から戻ったら、私達の基地にいる指揮官にちゃんと報告しないとね。

それじゃ、おやすみなさい……………



「それで何か分かったか？」

執務机に座る男が、目の前のモニターへと話しかける。

草臥れて所々コーヒーの染みがある白衣をシャツの上に羽織る、ボサボサの髪の毛を弄りながらダルそうにコーヒーを飲む女の姿が、そのモニターにはあった。

『んー、大体分かったわ。彼、わざとヒントを残してくれてるし……』

「そうか。では何故、彼女達の記憶データの書き換えを行えたのかね？」

机の上に広がるこの案件の報告書を男が手に取り、目を通しながら問い掛ける。

その内容を纏めると、つまりこうだ。

我がグリフィン所属の戦術人形部隊が任務行動中、第εΨ地区の緩衝地帯にて謎の自称傭兵を名乗る人物と遭遇。

その人物を現地協力員として、共に協力し回収地点まで移動。そして無事に戦術人形は無事に脱出することが出来た……が、その人物は回収部隊が来る前に行方をくらまし  
ている。

戦術人形達の記憶データから、人物の特定を図ろうとしたら……それらのデータが改竄されていた、と言うものだ。

当該人物の顔の部分には恐らく、日本語と思われる言語を組み合わせ書かれた謎の顔らしき画像が常に表示されており、分析不可能。

音声に関しても、戦術人形個別に違うスクランブルがかけられており、分析不可能。しかも、記憶が弄られているにも関わらず彼女達はその件に関して、一切の違和感を

持っていない。

……つまり、電脳にたいして何かしらのハッキングが行われたと言うことだ。

戦術人形の電脳は高度に守られており、余程の事が無い限りこの様な事は起こり得ない。

だが、現実是这样して改竄や戦術人形同士の機密通信に乱入されている事実、そしてそれらにグリフィンの権限を悪用されている事などを踏まえ、重大な案件として処理が行われている最中である。

救いがあるとなれば、今回の作戦はグリフィン司令部主導で行われている物である事から、隠蔽するのは容易であり……

この男が主に動くことで、騒ぎ立てず外部の女に調べて貰う事が出来たと言う訳である。

『彼が利用したのは技術部の上級補給管理官、の権限だっけ？』

そつちから貰った資料を見る限りだけど、その権限の中にある機密保持権限を悪用したんじゃないの？』

機密保持権限……技術部の運ぶ物が機密性の品物高い場合に限り、それらに関わる必要権限以下の認証しか持たない戦術人形に対して、所謂記憶処理を行える権利である。

例えば、その品物がアタッシュケースだったとしよう。

その権限に乗っ取り、記憶処理が行われれば……戦術人形達の記憶から物の形状やそもそも作戦に関わった事も消したり、アタツシユケースではない別の物を運んだのだと記憶を変える事が出来る。

だが、そんな事が出来る重大な権限は頑丈なセキュリティに守られている上に、利用する上でも制約や記録に残す事務的手続きを積まなければ実行出来ない筈の物だ。

「ふむ……だがそもそもどうやってその権限情報を手に入れた？」

ヤツが我が社から飛び出してから数ヶ月過ぎている。その間に何度かセキュリティや権限そのものの更新が入った筈だ」

『彼、そちら……ああ、ウチのもそうだけど技術部連中と仲良かったし、彼等の部署に良く遊びにいったから……多分、その時に仕込んだんじゃないの？』

……あ、今データ送るわよ』

画面の中で、女がパチパチとコンソールを弄り男のPCへとデータを送る。

「無事に届いたが、これは……」

カチリ、と送られてきたデータを開いてみれば……入っていたのは問題の権限に関するパッチやセキュリティ、そのデータが入るサーバーの管理に関する物だった。

その中の幾つか、赤字に代わり目立つように書かれた物が幾つかある。

『彼、有能だけど……凄いサボり魔だったから……』



その才能を生かして、誰も彼もがめんどくさいと思える様な物を作るのも得意だったみたいね……』

赤字に変わった部分が表示内容や繋がり読み進め、照らし合わせれば……それが意味するのはつまり、バックドアと言うものになる。

これさえあれば、外部から情報は抜けるし直接権限を行使することも可能だ。

「これを前に仕込んであったお陰で、今回権限にアクセス出来たと言う事か」

『そう言うことね。何も無しに外部から侵入するのはほぼ不可能なもの……』

……何度かその領域でチェックなりセキュリティの更新は入っているそうだけど、検査記録も見ると限り……全て問題なしになってるわ。

まあ、無理もないわよ。

赤字になってる部分、殆どが「チェックしなくてもほぼ問題無い筈の場所」だし……』  
「成る程。百々のつまり、人間の怠惰を利用したと言うわけだ」

『ええ、私だってそこ調べるの面倒だったんだから。無駄に量多くて無駄に手間がかか  
るし……』

最初から問題がある、と確信を持って調べなかつたら余程の生真面目でも無い限り、  
適当な所で切り上げて報告書には「問題なし」と書き込むでしょうね』

間違いなどほぼ出てこないと分かるが、それを改めて確認しようとしたら大きな手間

と時間がかかる……所謂、とても怠くて面倒な項目にバックドアが仕込まれていたと言  
う訳だ。

その後、何度もセキュリティのアップデートやチェックがあったとしても……最後の  
最後に確認するのは人間だ。

その人間が面倒くさがり、何度も放置し続けた結果、ここまでバックドアは生き続け  
たのだろう。

『それと、メモリーカードの中だけど……』

パツと見はでつち上げの履歴書に経歴書しか入って無い様に見える……けど、そこに  
暗号化されたファイルが仕込まれてたわ。中身はバックドアとかそれ以外の工作諸々  
の場所ね。……多分だけど、彼も申し訳ないとは思ってたんじゃないの?』

「すまないな、それ以外は此方で対処しておく」

『……それで、彼をどうするの?』

今までの怠そうな表情とは一変し、真面目になった目付きで画面越しに男を見つめ  
る。

「……何もするつもりは無い。

只、私としてはこのまま外には置いておきたくは無いな。奴は色々と関わりが多すぎ  
る」

『ふーん……で、前にM4から聞いたけど……』

彼、暗殺されかけたらしいじゃない？』

その言葉にピクリ、と男の臉が動き……指で思わず目頭を揉んだ。

「我が社も綺麗な一枚岩では無かったと言うことだ。例の事件で色々と利権や立場が変わったからな。」

……その一件に関しては、申し訳ないとは思っている」

早く治療して膿を取り除くべきだった、そう言い切つて男が口をつぐむ。

その様子を見た女は何か言いたげな表情を浮かべ、口を一瞬開くが直ぐに閉じた。そして、小さな溜め息を吐く。

『……そう、分かったわ。……で、今回の仕事はこれでおしまいつて事で良いのよね？』

「ああ、問題無い。送った資料やデータは事前に照らし合わせた通りに処理をしてくれ」

『はい……あ、今回の情報も彼女達に伝えても良いかしら？』

「別に構わん。」

奴の提出した書類は受け取り拒否しているからな。……脱走者は一度捕まえて、じつくりと話をするのが規則だ」

『では、お疲れ様です……』

そんな言葉を最後に残して、プツリと通信が切れる。

残るのはモニターに並ぶ多くの報告書に送られてきたそれらのデータの場所だ。

男は机に置いてあった、既に湯気のたつていないコーヒーを口に含み、一瞬顔を歪めてから元に戻す。

「お疲れ様、か。……昔から奴には本当に手を焼かされる」

すると、男は通信を何処かに繋ぎ出す。

「……私だ。今回の一件はもう問題ない。」

……今からデータと資料を送る。その通りに処置をしろ。

それと重要な部分は隠したまま、被害にあった彼女達の担当指揮官に情報を流せ  
……そうだ、今言った通りだ。

ああ、作戦地域と結果、少しの細部のみを伝えろ。……では頼んだぞ」

再び、プツリと通信が切れー男はクルリと椅子を回し、机に背を向けると座席から立ち上がる。

カシヤリとブラインドを指で開ければ窓の外には沈み行く夕日がぼんやりと浮かび、男の姿を隙間から伸びた光が夕日色へと染めていく。

「これで少なくとも情報は流れる。」

……関係を中途半端にして逃げ回るからこうなるのだ。

流石に少しは悪いとは思おうが……まあ、精々また追いかけて回されて苦労するが良い」

## 6 頁目

グラスを傾け、僅かにとろみを持つ透明の液体を少しずつ口内へ流し込む。

ボタニカルの薫りが自然と噴き抜け、複雑に混ざり合って調和する味を舌先で楽しんだ。

そして、するりと喉奥へと落としこめば——途端にカツとしたアルコールの暖かさがお腹の中を暴れまわり……徐々に沈み混んでいく。

椅子の上で身動きをすれば右手に収まるグラスの中で、裸になった大粒の水が一つ、寂しそうにカラリと音を立てて転がった。

グラスをテーブルへ戻し、霜が着く酒瓶の口を開けて傾ける。

とろとろと氷を伝いグラスに注ぎ込まれ、高さ3—4cm程のアルコール製の湖が再び姿を現す。

その中で浮かぶ氷を指先でクルリと回せば……先程とは違う……少し鈍く、でも何処か心地の良い氷の音が鳴り響く。

しかし……私も彼に悪い楽しみを覚えさせられた物だと思う。

最初は全然、美味しいとも感じなかったモノだと言うのに。

今となつてはこうやつてお酒を……しかも度数が40度前後あるジンを何も割らずに、そのまま味わい、そして楽しめる様になつてしまつたのだから。

薄暗い間接照明によつてぼんやりと照らさせる地下の小さな小部屋で一人、また一口、また一口と再度グラスを傾け、ちびちびと注がれたジンを飲み続ける。

名残惜しい、が。今あるこれをラスト一杯としよう。

折角、遂に見つけた彼のセーフハウスで確保した良い酒なのだから……大切にしないとね。

まだこれは安い部類に入る物で、そもそも少し位なら勝手に飲んでもあの人は怒らないだろうけど……どうせ飲むなら一緒に楽しく飲みたいモノでしょ？

メンバーの中で純粹に酒を楽しむのは私と指揮官、その二名だけ。

9は未々アルコール独特の苦味が苦手な様で、甘いカクテルやシールド、後は白ワイン位しか飲まない。

G11も同上と言つた感じだけど、意外な事に9に比べたらかなり飲める方ではある。

でも、二人共にお酒よりジュースがあるならジュースを選ぶだろう。

それに、純粹に酒その物を楽しんで居ると言うよりかは、彼が嗜む故に同じ楽しみや時間を得たいと言う欲求の方が強いのだから。

そして、416は…416は…：…うん…

私からはノーコメントって事にしといてあげよう。一応、彼女も飲めるには飲めるのだけど…：…ね？

おつまみとして添えておいたカルパスをひよいっと口のなかに放り込み、咀嚼する。

口の中を支配していたジンの空気に、硬い肉の荒々しい塩と油の味が広がり…：…良い具合に混ざりあつて変化を起こしてくれた。

少量のジンを再び口を含み…：…手を動かしてグラスの氷と液体<sup>ジン</sup>の動きを目で楽しんでから、油と共に喉奥へと流していく。

グラスの中をゆらゆら巡るジンの僅かな残量と小皿に残るカルパスの本数を数え、チラリと水滴を垂らす酒瓶を見つめる。

しかし、こうして瓶を見つめていると…：…彼と二人きりで飲んだ時間を思い出す。

のんびりとお互いにグラスを傾け、その味わいを楽しみながら…：…映画や日常の出来事を肴にして会話を楽しんだ大切な思い出を。

なんだかもう一杯位、飲みたい気分になっちゃった。

そおーっと手を伸ばし、右手が酒瓶を掴んだ…その瞬間、バタンと扉が勢いよく空いたではないか。

思わず、体を跳ね上げながらそちらを見れば…：…9が勢い良く両手で押し開きの扉を

跳ね開けて中に入ってくる所であった。

「45姉……ここに居……つて、あ……また勝手に指揮官のお酒飲んでる！」

椅子に座る私の方をビシリ！と指差しながら部屋の中へ。

そのままそちらを見つめ若干固まっている私の左横まで来ると、小皿のカルパスへ手を伸ばし……自身の口の中へひよいと投げ入れる。

「もぐもぐ……あまり飲み過ぎちゃうと指揮官に怒られちゃうよ？」

私の右手に収まる、中身が2/3にまで減ってしまった瓶へチラリと視線を向けながら、9がボソツと耳元に告げた。

「……そう、ね。これ位で止めておくわ」

確かに9の言う通りである。

手に収まる瓶を見れば……じくりと波紋のように罪悪感が私の中に生まれ、じわじわと広がっていく。

あの人少し飲んだ位で怒る程、心の狭い人では無いとは言え……決して良いことは無いだろう。

少し、利己的になりすぎてしまった事を恥じる。

隣に立つ9へと、テーブルの上を滑らせるようにして瓶を渡した。

9が瓶を受けとり……顔の前へ持ち上げ揺らしながらまじまじと見つめ、表のラベル



をトントンと指先でつついた。

「でも、指揮官に45姉も良くこんな……ジン？みたいな強いお酒をそのまま飲めるよね？」

私はオレンジジュースで割ったのとかじやなきや飲めないよ〜」

指揮官が初めて9に振る舞ったジンのカクテル……確か、名前は。

「オレンジ・ブロッサムのこと？」

「そうそれ！あれば美味しかったなあ〜」

……アルコールの苦い感じもそんなしなかったし」

「9もまだまだ、お子様ね？」

「むう……つて！いけない、いけない。」

用事を忘れるところだった！」

とてとてと歩き、他のお酒も並ぶスモークガラスの扉が付いた棚へ手に持ったジンをしらべてから、クルリと此方へ顔を向けた。

「情報を取りに行つてた416がさつき帰つてきたよ。……何だか興奮した様子だったし、多分指揮官について手掛かりを得られたんじゃないかな？」

「そう……で、416は11の所に？」

今の時刻は21時を少し過ぎた辺り。

早寝遅起のG11なら自室で既にモゾモゾと芋虫になつて居る時間帯だ。

「まあね〜？指揮官の寝袋取つてきてからからずつとそれで寝てるもん。」

……あー、わかつたよ45姉。ちよつと先いつて416の手伝いしてくるね」

流石は9、私の意図をキチンと理解してくれる。

カルパスを一つ取つて、9へひよいつと投げ渡す。

放物線を描いたカルパスは、狙つた通り9の顔の前へ飛んでいきーパシツと片手で受け取ると……ニコリと笑つた。

「もう一つあげる。これ飲み終わつたらすぐに行くから……本当にありがとうね」

カルパスをもぐもぐ咀嚼する9に、笑顔で色々な意味を込めたお礼を伝える。

「45姉……じゃあ、私は行くね？」

416と一緒に11を引き摺つてリビングで待つてるから早めに来てよね〜」

そう言い残して、手を降りながら9が扉の向こうへと消えた。

数分間、ぼーつと手持ち沙汰にグラスを回し、流れに巡る小さくなつた氷を見つめながら気持ち固める。

……さて、私もこうして感傷に浸り酒を飲んで居る場合では無くなつた訳だ。

グラスの中にある僅かなジンを一口で飲み干し、テーブルの脇に置いてあつたミネラルウォーターのキャップを開けて、半分程を一気に流し込む。

一気に流れ込んだアルコールの鈍く熱い広がりによって徐々に薄まり、消えていく。

椅子から立ち上がって、グラスやペットボトルの水に空になった小皿と使っていた物を纏めてテーブルの脇へと片付けながら、同時に体内の調整も行う。

私達人形も処理設定次第では酔おうと思えば酔える…が、今は酔っている場合ではないのは明白でしょ？

だから体内の生体処理やナノマシンの設定をいじり、アルコールの処理を最大限に行う様に。

さあ、早く行きましょう。

…上から寝てたであろうG11にドツタンバタバタと暴れる音がこの地下室で聞こえる位に416が熱くなっているのだから。



「何時も通りグリフィンの情報を漁ってたら、こんなものを見つけたの」

私達のセーフハウス、そのリビングの一室で416が端末を弄り……壁掛けのモニターへ情報を写し出す。

それをソファに共に座る9と私<sup>45</sup>。そして床に寝袋の上から縄で縛られて簧巻きとなっているG11の三人が見つめた。

そこにはグリフィンの戦術人形部隊が緩衝地域にて鉄血と戦闘を行った際のデータが写し出されている。

端から幾つかの通信ログや戦闘報告書……それに添付されている10枚前後の画像や動画と言った物で画面が埋まる。

その内の大半の画像は人形の目線から取った見慣れた戦闘を写したものであるが……

その中に三枚だけ、明らかに放置され荒廃を続けている緩衝地域には似合わない、ある程度整い家具や物が並ぶ1部屋を写し出した画像があるではないか。

その画像に移る部屋の物を見て……私達は一瞬で把握した。

「指揮官のセーフハウスね」だよね?」だね……」

私、9、G11の声と同時に並び、重なる様に飛び出す。

壁に大穴が空いて中へとコンクリートの破片が転がり込み、部屋の中が多少荒れてしまっているとは言え……

指揮官好みに作られた家具配置の雰囲気や酒にゲーム機が並んでいる様子を見れば私達が分からない訳がない。

「どうやら偶然、戦闘中にビルの一部が崩れて見つかったみたいね。」

「でも、指揮官の部屋に勝手に知らない奴等人形が入り込んだと思うだけで虫酸が走るわ……」

リモコンをグリグリ力強く押しながら、416が画面を切り替えていく。

次に現れたのは、位置がポイントされた地図と発見された日時などの情報の詳細が報告書の文と共に書かれた物であった。

「……私も同じ。でも今は見つけてくれた事を少しでも感謝しなさい。」

見る限り発見は二日前……随分と報告書が上がるのが早い。それで、場所はここからだ、と……車と徒歩で6-7時間位かしら？」

「この報告書を作成した担当指揮官が真面目な奴で良かったね……つて、酔うから辞めてよ9……」

そんな呟きに釣られ、そちらを見れば……9がソファから身を乗り出し、簧巻きのまま床に転がるG11を面白そうに手で左へ右へとコロコロ動かしていた。

「指揮官の事なのにすぐ起きない11への罰だよー？ほれほれ」

「う、う……世界がぐらぐらするう……助けて416」

「ふん。……9？<sup>ナイン</sup>後五分はそうしてもらえるかしら」

「鬼！悪魔！完璧主義者<sup>4</sup>！つて、本当に酔う…酔うから…！45、二人に何とか言つてよー！」

残念ながら無情にも蜘蛛の糸は足らして貰えなかったようだ。

……とは言え、これ以上グタグタするのも決まらない。

報告書には、「その場が落ち着き次第、余裕があれば見つかった部屋を調査をしたい」と希望が書かれていたのだ。既に二日も時間が過ぎている。

のんびりしてはいられない。

パンパンと二回、強く手を叩き……皆の意識をこちらに集める。

「はあ……これで終わりよ。そろそろ真面目に話をしなさい。9、<sup>ナイン</sup>縛ってる縄を切つて」

「はあーい」

スツと上着のポケットから折り畳みナイフを取り出し刃を出すトースツパリ、縄を切り裂いた。

力尽きるように拘束していた縄が散らばり、ニユルリとニーが寝袋から這い出てくる。

「た、助かった。ありがと45……」

大切そうに寝袋を畳み、寝袋に繋がってぶら下がっていた収納袋へしまうと、それを

胸に抱きながら隣にある一人掛けの椅子にドツカリと座り込む。

「そとう？」

ならお礼に明後日の布団元指揮官ので寝る権利の交代ね」

その言葉に、バツとまるでこの世の終わりの様な表情を見せて此方に振り向き固まった。

「……………冗談だよね？」

「私、あまり冗談好きじゃないの。1-1も知ってるでしょ？」

…………ちよつとした罰よ。少しは何時も起こして貰ってる。4-1-6に申し訳ないと思つて反省しなさい」

「えへへ、1-1怒られてる〜」

先程の表情のまま、私と4-1-6の間を視線をふらふらさせ…………諦めたのかボスりと寝袋に顔を突っ込んだ。

「おかしい…………ここ、セーフハウス安全地帯の筈なのに周り敵しかない…………」

「私は貴女の目覚まし時計じゃないのよ。何時も指揮官の寝袋を独占してるのだから少し位は我慢しなさいな。…………さて、話を進めて良いかしら？」

4-1-6が再び、リモコンをいじると画面の地図の縮尺が少し広がり、地図上へ新たに幾つかの円と二つの赤点が追加される。

「地図上の円は今グリフィンと軍が作戦進行中のエリアになるから……所詮、進入禁止エリアね。」

改めてこう見ると……本当、素晴らしい位良い隙間に指揮官はセーフハウスを構築出来る物だわ」

「その赤い点は前に私達が見つけた指揮官のセーフハウスだよな？」

9 が二つの点と新たに見つかったセーフハウスの地点を指で線を引くようになっていながら問い掛けた。

「そうね。これが一番最初に見つけて……恐らくメインで指揮官が扱ってたであろう地下室のセーフハウス。」

で、こっちが二番目に見つけたマンシヨンの中であつたやつよ」

リモコンについたレーザーポインターでなぞりながら416が説明していく。

一番目と二番目についた点は比較的近距离であつたが……新たに見つかった所はそれに比べそこそこ離れている地点にポツンと浮いていた。

それが指す意味は。

「……これ、地区を移動してない？」

「何、って事は今まで探してた所にはいなかったの……？ 眠いの我慢して頑張つて歩いたのに……」



「そう言うことになるわ。我らがリーダーが一杯食わされるなんて……流石は指揮官つて所かしら？」

416の視線を感じながら、じつと画面の地図を見つめて考える。

私達は数ヶ月前……居なくなつた指揮官の地下室セーフハウスを一つ見つけてから……その地区周辺を主に探してきた。

実際、二件目のセーフハウスも無事に発見出来た事。そして何より、その後も指揮官らしき闇市での目撃情報や電子通貨の取引記録と言つた幾つかの痕跡を見つけていたからだ。

とは言え、だ。

少し指揮官にしては足跡が見つかりすぎとは思つていたけれど……本当に流石よ。

「……ふう、流石は指揮官。一筋縄じゃ行かないな」

「で、どーする45姉？」

皆の顔をゆつくり見渡し……立ち上がり命令を下す。

「まずは、新しく見つかったセーフハウスに向かうに決まつてるじゃない。

……さあ404小隊各員準備しなさい。

市街地戦装備で今から2時間後を目安に出発。明け方……0700時前後には目標地点に着くように動くわ」

「了解、移動手段は？」

「確保してある使い捨ての足を使うつもり。……9、<sup>サイン</sup>準備少し早めに終わらしてもらっても良いかしら？」

一緒にY2のガレージに置いてある車を取りに行きたいから」

「おっけー！ Y2 Y2……あ。あのおんぼろ装甲車ね！」

「ドローンはどうする……？」

「そうね……熱感知の付いた飛行タイプが二機もあれば十分よ」

「分かったよ……うーん、使い捨て出来るそこそこ安いのにしとくよ」

「大体決まったかしら？」

収納ケース類はついでに私が用意しておくわ。もし、追加で何かあったら小隊の共通チャンネルにリスト上げて……それじゃ、お先に」

持っていたリモコンをテーブルに置くと、ひらひらと背中越しに手を降りながら416がリビングから出ていき、それに着いていく様にG11も出ていく。

「じゃ、準備終わったら連絡するね！」

シユタタ、と駆け足で9も部屋から飛び出していった。

さて、私も急いで準備するでしょう。

EMPグレネードに緊急用の爆薬類は私が用意する役割だ。

それに帰りはもしかしたら日が暮れている可能性もあるのだから夜戦装備も忘れてはいけない。

必要な物を脳内でリストアップし、同時に各員へ伝える為共通チャンネルにも上げておく。

——彼へ繋がる新たな手掛かりが私達を待っている。この機会を絶対に逃がしてはならない。

その為に迅速かつ完璧に準備を済ませる。

だから… 待っててね指揮官？

## 7 頁目

「うあー……疲れた。ねえ、まだ着かないの?」

所々倒壊し崩れた家やビルが立ち並ぶ、廃墟と化した町並みの一角で、よろよろのたのた隊列の最後尾をふらりふらりと揺れながら歩くG11が本日何度目かの泣き言を言い出した。

「後、大体30分位はかかるかな?」

「うえ……9、<sup>ナイン</sup>私……これ以上歩くの嫌なんだけど……?」

「んー、でも今から装甲車甲に戻っても寧ろ、倍以上かかるから頑張るしかないよ」

「最悪……ずっと家の布団でぬくぬくしてたい……」

後ろから二番目を歩いてきたUMP9が振り向き、クスクスと笑いながらG11の疑問に答える。

そんなやり取りを共に先頭を歩くUMP45の横で見ていたHK416は……頭を数回横に降りながらため息を漏らし、G11の元へ。

「……そんな事言っていないで黙ってキリキリ歩きなさい」

右に左にふらふらしているG11が身に付けるプレートキャリアーの肩紐を左手で

掴んで、無理矢理に引っ張る。

これまでも何度となく様々な所で行われてきたやり取りだ。

だから416も慣れたもので、ずりずりと引き摺りながらではあるが、G11を無理矢理にでも歩みを進めさせる。

「うぐ……ぐう……い……ねえ、416……私もう歩きたくないから背負ってよ……」

「ハッ……アンタの背負っている装備と銃が併せて何Kgあると思ってるの？」

そんな余計な重り抱えるのは御免こうむるわ」

「酷い………絶対416の方が重いもん」

ボソリと顔をずらしながら小さな悪態をつく。

しかし、残念ながら効果は出なかったようだ。

「全部丸聞こえよ。体は兎も角、アンタの銃程私は重くないわ。それにドローンがあるんだから重いに決まってるでしょ？」

「分かっているならせめてバックだけでも変わってよ……」

相も変わらずズリズリ引っ張られて歩きながら、恨めしそうにG11が背中の中のバックパックを見つめた。

その中には、404小隊の上空を自動追跡モードにて索敵を行っている雑誌サイズのドローンがもう1機入っている上、バックパックの脇にくっついてニョキッとアンテナ

を伸ばしている通信モジュールに、簡易型の充電器と運用する為の機材がドツサリ詰まっている。

無論、他にも必要な予備弾薬やら食料と言った物も混載して入っており、G11のバックパックはそこそこの重量物と化していた。

「うちの後方支援はアンタの仕事よ。それにキツチリ重量計算と配置確認をして入れたんだから、そこまで重くは無いでしょように」  
404小隊

実際416の言う通り、G11の体に異常な負荷が掛かるほど無理な重量は入れてはいないし、そしてより楽になる様にと重量物を分散して入れてあった。

歩兵と言う物は、ドンパチ戦闘する時間よりも両手に銃を抱え、その他十何Kgもある装備品を身に着けながらえつちらおつちらと目的地に向かって動く、行軍している時の方が遥かに長いモノだ。

故に、移動時に負荷のかからない様に装備品と言う名の重りは、無理のない量を計算し効率の良い配置で詰めている。

只、もつと言えば：404小隊彼女達は皆、バワードスーツ外骨格を腰から下半身に装備している。

流石に帰りや戦闘時でのバッテリー残量の事を考え、常にフルパワーでは無いにしても、行軍中でも数十%の低い出力で常にサポートされているし、その出力であっても歩く上でかなりの負荷低減をもたらしてくれる物だ。

つまりは——G11がだらけているだけである。

「……11、そろそろドローンの交代時間よ。」

それと、朝イチで眠いのは分かるけどもう少しっかりしなさい」

先頭を歩いていた45が、何時の間にか後ろを向いて居て……少し冷めた声色でだらけていたG11へ声をかけた。

「……あ、うん。今やるよ……」

その声色に釣られ、思わず45の方を見たG11は、コチラを見る表情に少し体をビクリと震わす。

「……………11、早くやっちゃいなさい」

チラリと45の方を確認し、ため息を付いた416がそう言い残してスルリと離れ、傍観していた9の横へ。

支えを失ったG11であったが、直ぐにキチンとした姿勢へと戻る。

「え、と……ドローンは交代で降りる様にしておいたよ」

直ぐに空中に浮かぶドローンへ降りる命令を送った様だ。

決まってしまうえば、行動は早いもの。

皆にカバーしてもらいながら付近の物陰に隠れ、新たなドローンをG11が下に降ろしたバックパックから出し、センサー類のカバー外し、プロペラの展開と各準備を終わ

らして……代わりとなる様に命令を送ってその場で空へと飛ばす。

すると、入れ替わりで同じタイプのドローンがふよふよと降りてきた。

顔の前に近付いてきたドローンを空中でキャッチしたG11は、素早く先程こなしたのと反対の作業を進める。センサーにカバーをつけ、プロペラを畳みこんでコンパクトに。

後は、充電キットのコードをドローン本体と繋いでバックパックへと閉まった。

「早く行くよ。……9、一緒に先頭を宜しく」

「あ、待つてよ45姉！」

G11が用意が終わったのを確認するやいなや一人早足で出発する45。

呼ばれた9が先に進んでしまった45を慌てて追った。

一瞬、置いてかれてしまった416とG11であったが、即座に警戒できる様に数メートル先に行く二人の動きに合わせて陣形を組んで、後を素早く追う……が、そんならしくないリーダーの様子を見て、置いていかれた二人は足を動かしながら顔を見合わせた。

「随分と焦ってるわね」

「ねえ……私、久し振りに怖い顔の45を見たよ？」

前、勝手に45のケーキとアイスを食べちゃった時を思い出したよ。



そんな独り言を漏らし、ぶるりと少し体を震わす。

「それと今回の件とは意味合いが全く別物よ。」

「……たく。何時も仮面を被って平気な振りしてるけど、指揮官の事となると何だかんだ45もアレね」

「……………そうだね」

お前がそれを言うのか、そう言いたげな表情で前を見つめる416を見上げるG11だったが、喉奥まで這い上がってきた思いはキュツと口を強く絞める事で外には出さなかった。

誰だつて面倒事になると分かっている上で、目の前に見えている地雷は踏まない物である。

「まあ、根本原因はアンタがダラダラしてるせいよ。45が急いでるのは乗ってきた装甲車の時点で分かりきった事なんだから少しは気を使いなさいな」

訂正。残念ながら別の地雷が無事爆発したようだ。

「あー、うん……。今日は帰るまで出来るだけ頑張る様にする……」

「《今日は》じゃなくて《何時も》出来る様にならないのかしら?」

「えー……無理?」

「……………ハア、本当にアンタは……」

再び、本日何度目かのため息を吐き出す416。

やる時は才能を遺憾無く発揮して働くG11であるが、大体はこんな感じでダラダラごろごろしている。そのON/OFFの落差が激しすぎるのが難点であった。

実際、何時もだらけているG11をある意味介護して上手く動かしているのが彼女だ。

「ま、良いわ。一先ず、今日は気を付けなさい。……早く行きましょ」

「りよーかい」

擬似的に数メートルの間隔で二人組に別れてしまった小隊の隙間を潰す。先行していた45、9の元まで駆け足で近寄った。

45はチラリと追い掛けて来た……特にG11を見ると視線を前へと戻す。

各自索敵を続けながら、場にピリツとした空気を漂わせ、小隊は廃墟と化した町を進み続ける。

彼女達も決して浅い仲ではないし、戦闘のプロである。ギスギスとした空気は過去に何度もあった。つまり、これくらいで全体の行動に影響など出さない。

そもその話、我らがリーダーは焦る感情をキチンと隠しているつもりなのだろうが……三人にはバレバレである。G11への態度もそうであるが、移動速度に周囲の索敵を行う時間が何時もより僅かに早いのだ。

その感情を三人共に分からない訳では無い。寧ろ、肯定を持って受け止められる事であった。

あの日から探し続けていた指揮官の事であり……暫く振りの大きな手掛かりを得る為に私達は今向かっているのだから。

とは言え、だ。ここは誰の物でも無い緩衝地帯。居るのはグリフィンや鉄血連中だけでは無い。

瓦礫から財を漁る野良浮浪者とモジャ呼ぶを筆頭に環境・人権屋・薬物・カルト集団と言った各種違法武装集団が居ても可笑しくない地域なのだ。

その感情を理解した上で平静を保ち続け、隙を見せない様、45に合わせて動き続ける。

と、言うか……何時も冷静で猫被っている45が珍しく焦りを見せているのだ。

他の三人は心配と言うより微笑ましい、珍しい物を見ているのが正しいだろう。

9は45姉のレアな可愛い一面を見れたと笑っている。416は後で弄るネタを手に入れられたとほくそ笑みを浮かべているし、G11は後でちよつとした騒ぎになるのを解った上で傍観に徹していた。

そんな小隊が隊列を組ながら三十分前後進み続ければ……広域地図上に浮かぶ旗のマークに私達の位置を示す光点が4つ、重なった。

同時に地図が拡大され、付近をより細かく移した内容へと変わる。

100〜200m先には中層階付近の壁に大穴が空き、弱冠崩れた15階前後のマンションが建っている。

「ハイ、ね」

「ドローンで周囲のサーチ入れるよ」

G11がテキパキと手を動かし、腰につけていた小さなラジコンサイズの走行ドローンをほいっと投げて自動モードにてマンションへ走らせる。

時々びよんびよんと障害物を跳ねながら避けて走りつつ、砕けたオートロックのエントランスの入り口を潜り抜けて走行ドローンがマンション一階へと入っていく。

上空の飛行ドローンは、クルクルとマンションの周囲を外壁に沿って飛ぶことで、ワンプロアずつ索敵を入れていく。

小隊は付近の物陰に隠れながら、真面目な顔でドローンから送られてくるデータを処理しているG11の動きを待った。

「二階は一先ずクリア。それより上は…無理。安物のドローンって言うてもサーモはそこそこ良いの積んでるのに……」

G11から送られてきたデータには割れたガラスや砕けた壁の部分は中をしつかり見れている。しかし、それ以外の部分は全く熱のデータを取れていなかった。

昔と違い、一定ランク以上の物であれば今の時代の軍用サーモグラフィー熱感知器は建造物越しに中を覗くことが出来る代物だ。

無論、限界はあるし何十層も壁を越えて詳しく覗こうとしたら軍の連中が航空機や衛星に乗つけて運用するレベルの代物になってしまう。

とは言え、これ位普通のマンションなら横から見ればある程度は覗ける筈……のだが、見る事が出来なかった。

その理由は2つ……だがこの場合、実質的には一つしかない。

除けなかったのは搭載されたサーモのスペック不足も勿論だが、そもそもこのマンションが建物内を覗こうとする手段に対しての対策されているからだろう。

そんな糞金も手間も掛かる建物を建てるのは、そういった驚異に晒される政府・公的機関関係、もしくは余程の金持ち専用の建造物位。で、目の前のマンションは明らかに後者が住むような質では無いので……必然的に前者と言う事になる。

「つて事は45姉、この建物つて民間向けフツターのマンションじゃないよね？」

「ええ、そうね。はなっから怪しいとは思ってたけど、やっぱり軍関係者専用……しかも佐官クラスに用意されたマンションかな？」

手に持ったPDAで世界が壊れる前の地図とドローンのデータを分析しながら45が答えた。

「……おもいつきり厄ネタじゃないの」

「え。……もしかしてヤバイ?」

「ここら一体は世界が壊れる前から、ずっと実質的にとある国家の領地である。

既に放置されているとはいえ、その国家が所有する軍隊組織…その軍事機密に一定関われる階級の連中が住んでいた専用のマンションを知らずとはいえ、G11は漁ってしまつたのだ。

「バレたら間違いなく面倒臭い事になるでしょうね」

その返答にG11がガーンとした表情を浮かべ、頭を抱えへたり込む。

「さ、最悪……。そもそもなんで指揮官はこんな所に住んでるのさ……」

「余程の馬鹿でもない限り、生きてるかもしれない地雷原に飛び込まないでしょ?」

ある程度知ってる奴なら建物を見れば察して近付かない、勿論PMCも。周囲をドローンで空撮しても撮つた連中が勝手に誤魔化して隠してくれる。……居るのがバレなきや最高の隠れ家ね」

「でも、今回は追つかけてた鉄血連中がこの辺り…マンションに逃げ込んで戦闘になつたせいで見つかったって事だよな?」

9がデジタル双眼鏡でマンションの方を覗きながら45へと問い掛けた。

「そういう事。終わって調べてみたら、グリフィンの面倒臭い所で派手にドンパチし

ちやったし、オマケに誰か住み着いてる形跡あるから……急いでお上にお伺いする為に報告書が上がったって所じゃないかな？」

ま、とつくの昔に隠すべき機密は処分されてるだろうけど。そう言い残し、45が準備を始める。

「でしようね。とは言っても、下手に近寄りでもしたら何時難癖つけられるか分かったもんじゃ無いわ……」

関わりと禄な事にならない臭い建物よ」

416は口を動かしつつ、面倒臭いのは嫌だとか呟きながら地面に体育座りしていたG11を引き摺り起こす。

「……たく、直ぐへたりこむんだから。」

終わり次第、ドローン壊して端末側も完全にデータ消せばバレやしないっての」  
「え、本当？……なら良かった。」

軍関係の面倒事は御免だね……後で色んな方面から怒られるんだもん」

「416の言う通りよ。私達の痕跡さえ残さなきゃ何も問題ないわ。」

精々、今回の一件でグリフィンの誰かが軍から小言を言われる位ね。……9、小道具は用意してあるかしら？」

小隊各員が狭い建物内に入る為の準備をする中、人早く終わらせた45は9へ顔を向

ける。

それに答えるかの様に、片手でVサインを浮かべながらポンポンと腰のポーチを叩く9であった。

「バツチリ！ちゃんと言われた通りに用意してきたよ」

「ありがとう、9。各員、内部は視界不良の可能性大だから警戒しなさい。……じゃ、行くよ」